明治初年（当時の記録なし）頃木曽川の大壊のため当寺も民家と共に流される、当時は現在地より三百メートル程南下した西欠下にありました。その後無住、明治十二年六月貞順春光尼が住職され現地に茅葺きの寺を再建されました。大正七年十二月二十七日現住職石屋良仙が十八世として住職に至る。（尼僧住職では三代）

大正八年現在の本堂兼庫裡を新築し、現在までに増築改築する。

昭和四十五年五月男僧を迎へ昔の法地に変更す。当宝林寺の本尊は勢至観世音菩薩で木像にして御丈量一尺三寸の座像にましまして蓮華の台座に安置す。合掌印の印相にして光背は舟後光にして宝瓶を安置せる宝冠を召させ給う。

○不動山　松本寺（臨済宗妙心寺派）

当寺は本尊観世音菩薩を安置し御丈量一尺の倚像にて炭石に倚らせ給う。これを磐石座と称せらる。吉祥印の印相で左手に蓮華一枝持ち給う。舟後光の光背にて宝冠を召させ給へり。

松本寺は寛文二年下切区日比野治左エ門創建にして、開山新加納少林寺第二世体道和尚で往古水害のため流失せり、それ以後ほとんど跡もなく数年後の元禄三年十一月体道和尚山脇の不動山の麓を通り罹ると、どこともなく一人の童子現われ体道に向って申すには、この地は由緒深き霊地なれば茲に寺を建るべしと言ってどこともなくその童子失せにけり体道はこれは仏のお指図ならんと日比野治左エ門に依頼して共に努力して建立せりと言う。

○久昌寺（日蓮宗）

本尊三宝尊にして御丈量一尺の座像にして蓮華の台座に安置し給へり、賢実印の印相にて舟後光の光背にあらせらる。久昌寺は弘治三年十月前渡村地頭四代目坪内嘉兵衛の創建せるものなり。

○妙智寺（臨済宗妙心寺派）

当寺の本尊は観世音菩薩を安置し奉る。御丈量一尺の座像にして蓮華の台座に安置し給へり、弥陀定印の印相にて舟後光の光背にあらせらる。

延宝四丙辰年十一月新加納村少林寺第三世体道創建せるものなり、宝永五年焼失し文政三年二月再建す。昭和七年再び改築せり現在に至る。

○桃林寺（臨済宗妙心寺派）

本尊観音菩薩を安置し給う。御丈量六寸の座像にして蓮華五重の台座に安置ます。吉祥印の印相にて左手に蓮華一枚御持ち給う。

桃林寺は天文七年五月友峰創建せり、往古木曽川中洲にありて寛永六年五月洪水のため流失せり後文化四年四月再建せり、昭和二年三月老朽により改築す。

○儀宰院（臨済宗妙心寺派）

本尊観音菩薩を安置し御丈量一尺五寸の立像にして蓮華の台座に安置せらる。

当院の創立は年暦不詳、然れども正徳五乙未年新加納村の本寺法光寺初祖屋天景規本村村上小左エ門と協力相議し当庵の隆盛を図りたるにより屋天和尚を開山と称せり、以降寛政年間右法光寺第二世峰徒弟恵勝再建せり、これを中興開基と号する。

○若宮神社　（下切）

祭神　天照大神

由緒　天正年間字西欠上字山下北船本より今の坂西に移し下切村、山脇村、松本村、三ケ村の総社とす。

大正十一年十一月春日神社、八幡神社を合祀し神明神社を若宮神社と改称せり、同年同月付を以って神饌幣帛料を供進せらるに至る。

祭日　十月十五日

○津島神社　（下切）

祭神　須佐之男命

由緒　享保十三年十一月奉祀す。年月日は不詳なれども側らの山神社と合祀せり。

祭日　旧三月一日、旧六月十五日、旧十月一日。
旧十一月一日、新十月十五日。

○熊野神社　（東区北島）

祭神　家律御子神、熊野久須神、速玉男命。
由緒　創立年月不詳なれども往古木曽川中洲にありて寛永六年五月洪水のため流失せり、貞享二年永井七兵衛再建せり。昭和二年十二月三十九日焼失昭和三年十二月再建す。（祭文殿のみ）
氏子　北島区民
境内の三社（神明神社―天照大神、稲葉神社―火遇知神、稲荷神社―倉稲魂神。）

○神明神社　（東区両内野）
祭神　天照大神
由緒　宝暦二年創建さる。大正五年十二月本社社殿、祭文殿を新築す。
祭日　十月十五日。
氏子　両内野区民。
境内二社　稲葉神社―軻遇槌神、稲荷神社―倉稲魂神

○神明神社　（西区一番地）
祭神　天照皇大神
由緒　元新加納の氏子の氏神にて前渡には何等の関係なき神社なりしと言う、祭神も往古すぐ北が川なりし時子供が持ち出し流失し現在は単に御札のみ。
祭日　旧七月十五日
氏子　西区一（高崎、奥村二、苅谷二）五戸

○八幡神社　（東区三軒屋）
祭神　応神天皇
由緒　享保六年村上小左エ門奉祀す。
祭日　十月十五日、旧八月十五日
氏子　三軒屋区民。

○神明神社　（長平）
祭神　天照大神
由緒　大古石瀬神明と号す。大正元年九月二十三日暴風のため本社倒潰せり大正二年三月改築す。
祭日　二月十六日、十月十五日、十一月三十日。
氏子　長平区民。

○白鬚神社　（西区六番地）
祭神　猿田彦神
由緒　不詳
祭日　旧正月五日、十月十五日。
氏子　西区（田中、長瀬、後藤）

○北野神社　（西区山屋敷）
祭神　管原道真公
由緒　足利将軍義視時代坪内藤左エ門藤原頼定なる者、諸国浪々中織田家に附従、濃州松倉の里に知行主となり、その末裔代々武功を現し、慶長六丑年坪内嘉兵衛の時に至り、知行所前渡に居を定め、安永二年十二月に坪内家の守護神として邸宅に隣接する現在の所に一宅を建立し、知行所の村人と共に国家安泰、武運長久、五穀豊饒を祈願するに至れり。
正徳亥年より毎年正月二十五日を例祭日として、坪内家より白米三斗を洗米料として奉献することになり、願望成就の霊験著るしければ、前渡村本郷総氏子となりて文武豊作を守護し給う神として又文学の神として信仰を深めるに至る。
降って明治の代となり、坪内嘉兵衛昌寿の実弟資織は京都北野天満宮の宮司に任ぜられたるも続いて崇敬篤く帰郷の際には必ず参拝、北野天満宮千年祭万燈記念の油皿、和歌等を寄進せりと。
安政四己年棟札奉造営天満宮拝殿
濃州各務郡前渡村願主氏子中
同郡各務村工匠長縄忠左エ門藤原春平
同国羽栗郡上中屋村木挽尾関平六
文化十二亥年二月二十五日棟札奉上葺天満宮大自在天神宮拝殿
祭日　旧正月二十五日、十月十五日。
氏子　西区（小野木、五島、加藤、長瀬、富樫、山本堀、丹賀沢、河田）

○神明神社　（西区）
祭神　天照大神
由緒　不詳。伝説によると稲荷様神明様オクワ様の合祀なられしものなりと言う、前渡地頭坪内様の相当なる

信仰されたる由伝へらる。
祭日　十二月三日、十月十五日。
氏子　前渡西区民。

○祇園神社　（西区）
祭神　須佐之男命。
由緒　足立清吉方火災の際由緒書焼失し不詳。
伝説には元才天王と称せしが足立悦夫氏の父庄太郎若年の折帳製作の都合上祇園神社と改称せりと言う。祭典の晩提灯を持って来るは昔坪内家より来詣されて燈火を付け然る後一同の民がその燈火により火を付け持ち帰えりたりと言う、それを真似たるものなり。
祭日　旧六月十五日、十月十五日。
氏子　松波、足立氏。

○稲葉神社　（下切宝林寺内）
祭神　迦具土神
由緒　文化十三年奉祀せり。
祭日　旧一月二十八日、八月二十二日。
氏子　下切区民。

○稲荷魂神　（下切宝林寺内）
祭神　倉稲魂神
由緒　明治二十年三河豊川より分身を戴き奉祀す。
祭日　旧二月初午
氏子　下切区民

○秋葉神社　（桃春院内）
祭神　迦具土神
由緒　不詳
祭日　旧正月、五、九月の二十六日
氏子　前渡西区民。

○稲荷神社　（桃春院内）
祭神　倉稲魂神
由緒　不詳
祭日　旧二月初午
氏子　前渡西区民

○不動山　（山脇）
祭神　不動尊
由緒　今より二百有余年前新加納坪内伊豆守の建立。
祭日　旧二月二十八日。
（境内に稲葉神社祀れり）

○市杵島神社—辨財天—（東区）
祭神　辨財天
由緒　濃洲鵜沼の里伊木山東北木曽川の辺りに龍宮ケ城（犬山城の北方にありて現在龍宮池と称す）あり此の下流に龍宮ケ淵あり附近に太郎（生れは中央線沿に「寝醒の床」あり其の在所と伝へらる）と云える。一猟師あり魚釣りに専念し居眠りて夜更しいたるに枕辺に世にも稀なる貴美人現われて曰く「妾と夫婦の約束して給れ」と申されたるので太郎は余りにも事の意外に打驚き身分の相違が甚だしいので断りたるに美人曰く「縁結びに身分の上下はない是非共妾の夫になって頂くよう申され是なる箱を渡して置く結婚式は安芸の宮島に於て挙げるから此の箱を持参して待っていて下さるようこの箱の蓋を必ずあけないようとの言葉に太郎は遂に賛成承諾なし其の箱を最も大切にかかへ喜び勇んで尋ね〳〵て西下し漸く安芸の国宮島にたどりつき厳島神社辺りにて件の美人を待ち詫び幾久しく魚釣りを渡世業として長歳月を送りしが先に約束をしたる美人は妾ついに真見えず落胆失望の体にて再び鵜沼の宿伊木山の東の龍宮ケ淵と呼ぶ木曽川の本流左巻のある川岸まで舞い戻り彼の箱の蓋をあけ曩に約束をしたこと如何なりしかと心乱れて放心すること七日間も過ぎんとせし真夜中にあら不思議なるかなや件の美人現われ「余は此の在所の下流摩免渡（前渡）の辨天岩に鎮座する辨財天であるが先に其方に授けし奇き是なる玉手箱を所持致させ汝の寿命の試し見んとて今より七百三十四年前に汝に授けし是の玉手箱今に至り蓋を開けし故詮方なし若し蓋あけずして所持致しなば決して老衰することなく寿命ながらうべしゆめ疑うこと勿れ」と告命ありて直ちに妾は消へ給へり、其の不思議に感じ入り太郎は直に彼の辨財天岩上に鎮座します大神に対し其の奇端極まる霊験に深く感じ入り感謝報恩去らず崇敬措かざりき其後延命と縁結びの守護神として普く知られ

信者には必ず霊験あり参拝者の踵を断つことなかりしと伝へらる。世に浦島太郎とは（太郎が安芸の厳島の浦に住めること七百三十四年故に後世に至り浦島の太郎と名付）玉手箱に因む伝説は是れが抑もの起源なりと伝へらる。

当神社は福徳寿の守護神であらせられるが特に延命と夫婦縁結びの神として参拝者多く縁結びの古奇大木の実存するは崇敬者の賞揚の的となっている。

祭日　四月二十五日大祭、毎月二十五日例祭

氏子　前渡東区全部。

（縁起の調査不十分であることをおわびします）

宝林寺と私と前宮村

石屋良仙

私、今年取って七十八才の老僧となりました。指折り返えりみて考えてみますと、私がこの曹洞宗・興聖山・宝林寺住職を選んだのは、五十三年前の夏でした。当寺は、曹洞宗にては平僧地と言って普通男僧が住職につかなくてはならないという、県下に二カ寺あるのみの寺格でした。が、男僧は、十六世で止まり十七世には寺格お預けとなり住職は尼僧に変わり私は十八世として満五十三年住職して居る事になります。五十三年間には、いろいろな事がありましたが、幸い健康に恵まれ今も元気で昔のいろいろな苦労も忘れてしまう様な平和な毎日でございます。

明治の中頃とか、七十才以上の方は聞いて御存じの事と思いますが、木曽川の大堤で常貞寺前の堤防が切れ寺も人家と共に押し流され、荒漠たる有様だったそうです。当時貧乏寺とて壇家は無く、僅かの土地はあっても到底食べて行くだけのものではなく、長い間無住となっていたとかで、寺も一寸としたお堂で人の住める事は出来ず、荒れ果ててしまっていましたが、ある奇特な尼僧が現われまして、昔の事とて食べる物も食べず托鉢参舞とか申しましょうか。彼方此方と歩き廻り施しを得て、尾崎山ほとりとかに有った仮堂を、一生懸命働いて土地を買い

何とか目鼻が付いた頃、現在の土地に移されお粗末乍ら茅葺き屋根で寺らしい格構の家を建て、其の外、田地も買いやっと一人位は食べて行ける様になったのが、明治の晩年だったとか聞いております。私が、当地へ参りましたのは、大正八年二月五日だったと覚えて居ります。仲人はこの寺の本寺で加納の久運寺と申しまして、加納姫様の御菩提寺であり、門構えのそれは立派な大寺でしたが、今ではすっかり町並みにつぶされ、小さな御堂があるのみで当時の姿を思い出す何もないのです。本寺住職の話で、今は亡き総代三名が一日弁当持ちで師匠の所へ来られ種々事情を説明され、何でも要求を聞き入れるから是非にと頼まれまして、最後に必ず住職の辞令を取ってから入寺と言う事で私も納得致し、翌年住職の辞令を持って入寺致す事になりました。さて、入寺に当り、下切まで到着するまでが、大変でした。今時は、バス・タクシーで気軽に一時間足らずで参られますが、当時は木田から忠節までゴト〳〵と電車で二十分。忠節から柳ケ瀬迄徒歩、美濃町行きの電車で又二十分位の琴塚で下車。さあー、これからが大変でした。駅前に人力車が二台程有ると聞いて居りましたが、私の入寺の日には相僧く一台もなくて止むを得ず師匠と共に大きな信玄袋二つを振り分に背負い、二里余りも有るとかの道をゴンゴロ下駄でスタコラ、サッサと歩かなければなりませんでした。御存じの方もございましょうが、当時琴塚から那加の山後までは一軒も人家はありません。又小学校から新加納までもほんの僅か有っただけで淋しい道でした。新加納の林酒屋の東に五、六軒仲仙道に添って家がまばらに有って、それから下切までは一軒きり古びた小さい家があり、駄菓子ならほんの少しずつ並べ、十本位のラムネを水の入った桶に入れて売って居られたのみでした。私と師匠はこの店で二銭のラムネを一本づつむさぶる様に飲んで暫時休憩させて貰い再び下切へと足を運ばなければなりませんでした。有名な各務原にたどりつき、一連隊を右に見て二つの大きな松林の中を通り抜け、やっとたどり着いたものの予想よりも伽藍の見すぼらしいのに驚きました。果たしてこの寺で暮す場が出来るだろうかとすっかり気落ちしてしまってその晩は、眠る事も出来ませんでしたが、朝方になりやっと考え直し、末だ若

い二十五才。なんとしても頑張ろう。自分から希望して来たのだと心に誓って翌々日から早や十名余程の村の娘さん達の裁縫を教えて生計をたてなければなりませんでした。

暫時の間は夢中で真面目にやっておりましたが、慣れてくるとボツ〳〵愚痴が出るようになりました。けれど御弟子さん達に励まされたり、村の人々には慣れ、なぐさめられたりして頑張りました。そんな頃、寺の再建問題をボツ〳〵考え始めておりました。それも或るきっかけでトントン拍子で決定し実現致しました。そしてめでたく完成致しましたものの、さて、お金の問題となりました。村内も又隣村の信徒の皆様からも沢山の御寄附を頂いましたが、予算超過と申しましょうか。予想以上の金が掛り金策に困ってしまいました。種々協議の結果、借金をし、そのお金を村講を立て毎年々々掛けてボツ〳〵返金する事にして、私は当時のお金で三千円程の借金を引き受け、サラリーマンになる事に決めました。ありがたい事に時の村長、村上文雄氏、学校長、永田新兵衛氏の進めもあり、前宮小学校の一教員として働く事になりました。

小学校では、十三年間程御世話になりましたが、着任した時は月給十六円也の代用教員でした。今の方々はお笑いでしょうが、当時代用教員の給料としては優待でした。女子師範を出て初任給上が、二十円、下が十八円だった時代で、翌月から倍額となりました。十二年間殆んど一年生のみを受け持ち、外に上級生女生徒に裁縫と家事を教え、村処女会が設立されてからは、専ら課業外は処女会の方を引受け、若い娘さん達と楽しんだものでした。それまでは、娘さん達もあまり外出はされていないようでしたが、会に入ってからは、珍らしいのとお友達に会える楽しみとで、出席も良くとても真面目で秩序を良く守って活発な会を育てられて行きました。やがて、日頃の研究心や、腕前を他町村、又県の主催の講習、講演等に出場し発表致す様になり、郡初め県にも見とめられ表彰される事、度々あり益々会員は熱心さを増し女子青年団として大きくなりました。それからもおかげを持って私も三年目には、尋常高等小学校の訓導を拝命出来大正十三年の五月に、全国教員大会出席を県より選出さ

れ、女子師範付属の稲垣先生と二人で上京致しました。当時汽車賃は割引きで往復八円程度でした。汽車も今では見るのに一苦労であるデコ1ですが、煤まるけになりながらも、弥次さん、喜多さんとのんびりした旅でした。そして、ついた東京と言ったら一年前の大震災で、未だ荒野と同様の状況でしたが、会場は幸い焼け残り百名程の会員は収容出来、大会一日目は君が代斉唱、文部大臣の教育勅語奉読に始まり順調に進行致しました。そして二日目の朝、新宿御園拝観し、午後は三班に分かれて文部大臣官邸に招かれ、映画を見せて戴いた後、今でいうパーティーを催して頂き楽しい一夜を過し宿に帰えりました。宿といっても震災の後で体を横に休めるといった程度でした。三日目は、鎌倉から江の島と遊覧して、またシュポ〳〵と窓の外の流れ変わる景色を見ながら前宮へ帰えって参いりました。又、十年後の婦人会、処女会指導者代表の三週間にわたる長期講習会が、赤坂の明治会館にて開催された時も、県一名の出席で村費や旅費を頂き出席させて頂きましたが、今から思いますと、本当に有がたいことと感謝致しております。東京駅も十年前とは違い立派になり、町も生まれ変わった様に復興しておりました。東京駅に朝着き、教え子の一人が近衛師団に入隊しており、親さんからの預りのみやげを持って、タクシーならず人力車を拾って裏門まではスムーズに行けました。裏門の門衛に事情を話しやっと許可をもらい中へ入れてもらいましたが、その時は都合良く教え子は表門執務中と分かり、一人の兵隊さんが「私が案内しましょう」といわれましたので、大股で歩かれる後をいそぎ足でついて行きましたが、途中度々の「敬礼・歩調取れ、ナオレにはどうしょうかと思い乍らもやっと目的の人に会え、なつかしく話し会いましたが案内して頂いた兵隊さんは上官と分かりあらためて、頭を下げ直した事を覚えております。明治会館での長期講習では、新しい知識を一つでも沢山覚えようと一生懸命受講しました。その知識は現在でも役立っておりますが、私の人生の中で小学校の教員生活、処女会時代がどれ程貴重であったか、今の生活をみると有難度い程良くわかります。

小学校退職後は加納の寺の幼稚園設立のお手伝いを頼まれ、その甲斐あって一カ年後には立派な加納幼稚園が

開園致しました。私も保母さんとして、小学校の子供達より小さい児を相手に毎日を送りました。下切から加納までの通勤は、高山線を利用していましたがその頃の汽車ものんきなもので、私がぬかるみの道をぐちゃ〳〵とげたの歯を取られ乍ら行くと、汽車の窓から、「お客さーん。お乗りですかー！」と、よんで下さったものでした。幼稚園も園児が増え、増築せねばと思い計画されていた頃、大東亜戦争が始まり、計画もそれきりになってしまいました。私もその頃は、愛知県の木曽川町の中島のお寺に兼務住職をしておりましたが、戦争の色濃くなり国民の生活もだん〳〵と自由がきかなくなって来ましたので、兼務住職を解任致しました。村の信用組合の方も人手不足で困っておられ、是非にと頼まれ止むなく幼稚園を辞し組合に勤める事になりましたものの、仕事は全く解からず、小学校の教え子に教えて貰うと言う様な有様でしたが、待遇は勿体ない程でした。

やっとその頃になって、本職の宗門の団体へも顔を出すようになり、尼僧団に加入し直に重役を命ぜられ県内は勿論全県を各年毎に廻り、尼僧団の総会に出席し各県の宗門関係者とも顔なじみとなり、法友も出来ました。そして現在も事有る毎に交際し、世間がより広くなりました。各県を廻っていますと、その土地々々のめずらしい料理、新しい料理法の食事を戴く機会が多くなりだんだんと料理に興味を持ち又、組合も退職し身体に余裕が出来、健康であったため、東京の料理学校で勉強し免状をもらい、その知識と趣味を生かし、村の婦人会は昼、女子青年団は夜と、料理の講師をつとめさせて戴きました。戦時中、戦後と物資のない時代、学校関係、村関係の会合の有った際は、必ず女子青年団を繰り出し、種々料理を差し出し皆様から感謝された事がありました。又他町村の婦人会、青年団の講師にも出張致した事も、随分有りました。

この様に人生の大半を僧侶の本業とする「御仏にお仕えする」という生活からは縁遠くしていて、還暦の年を迎えました。その頃、世の中も戦後のあの殺伐たる生活から、潤おいを感じられる生活となっていました。小学校時代の教え子も立派に成功され、一年生の鼻たれ坊主や、泣き虫の面影等、全くなくなってしまいました。け

れどいつまでも変ることのない思いがございます。それは、私の人生にとっては何よりも掛替えのない師弟愛でございます。還暦祝といって、赤の布団一流れを「先生にはこんなに沢山の教え子という子供が居るじゃないですか」と祝って着せてくれるうれしい心に、子供がないから赤い長襦袢も着れないと言って笑ってあきらめていた私は、ただうれしくて泣いた事を覚えております。そして又、ある年等は九つものクラス会に招かれ、忙しく出席させて戴いた事もありました。現在もお正月には、少なくも二つのクラス会から招待を受けます。又お正月とお盆の二回、必ず私の元を訪れてくれます五人の女の教え子があります。一人は遠い声屋から四人は地元ですが、何かと忙しい主婦の身、それだけに余計うれしく、一年の楽しみにして待っております。この五人は、「色は七変化すれど花の生命はいつまでも、変わらぬあじさいの花」と、自分達をあじさいにたとえ「あじさい会」と名をつけ、良きにつけ、悪きにつけ足を運んで共に喜び慰めてくれます。今年等は、紫の毛布とそば殻の枕を不老長寿の祈りをこめて贈ってもらいましたが、その毛布を手にしながら、昨年は七十八才の身で二度も手術をしたが、今こうして六十年に一度しか来ないという本うるう年を迎え、まだ〳〵長生きして欲しいと言ってはげましてくれる。本当に生きていて良かった。生きていて良かったと思わず仏前に拝礼し、これも七十八才の労身の力だけでは決してないと合掌致しております。宝林寺に来て五十三年間無事に本尊様をお護りさせて戴いているお蔭と感謝致して居ります。

当寺の本尊様は、勢至観世音菩薩と申しますが、観音様のお持ちの尊い力に、安産のお力をお具えになった仏様で、あの有名な八代将軍吉宗が就任し、名奉行大岡忠相が世に出た年「享保元年八月」より今日まで、如何時代が変ろうとお寺の場所、建物、人々が移り変ろうと、いついつ時も、二つの千里眼で眺めておられた事でしょう。宝林寺開山より二百五十余年の歴史の中には、大きな寺変がありました。しかしこの三年間の私の行った寺の改革には、さすがの観音様もびっくりなされたことと思います。宝林寺の跡継ぎがこの寺で、産声を上げたのは、この寺はじまって以来の事です。先代に如何名僧が

おみえになってもその方も人生の途中他地からおいでになったお方、私もやはり因縁有って住職した身。これは私の行った寺改革の結果、さずかった孫でございます。

そもそもきっかけは、私が全日本仏教尼僧法団の総会に出席致すたびに、団員各自の意見とか、愚智、悲しみを聞き、よくよく考えさせられたものでした。又、この土地にも皆様御存じの様に無住の寺が、四カ寺もありますし、寺の後継者問題で頭をなやましておられる寺も少なくは、ございません。このような事に私の教員生活時代の経験が影響し、昭和二十八年の夏、当時六才でもらった娘の中学卒業後の教育から改めて参いりました。それ迄は、本人も私共も、高校を卒業して剃髪し宗門の教育機関に入いるつもりでしたが、壇家のない寺を維持し生活していくだけの経済力を持つ事が、先づ第一と思い本人の希望する高校へと進ませ、私と同様職こそ違いますが、サラリーをもらう勤め人となりましたが、その間に尼僧としての資格は取得し、他の寺院へ又信徒の法事、葬儀にも出席出来るようになり成人致しました。又、大正十四年より風雪を共に感じ暮している弟子も、副住職の位を得、私も尼僧としては最高の位をもらい、尼大和尚としてはこの時が一番と思い、住職五十周年の記念式典を行い、新しいスタートラインを引いたのでございます。その為には、五十年前の本堂兼庫裡新築にはおよばず乍らも、有り金をさらえて離れの院寮新築、別屋外山門と造る寺維持の事業が必要でした。まあ〳〵これで男僧の寺にしても若い中、二足草鞋をはけばなんとかやって行けそうに思い、下切区民代表の方々とも相談の上、婿をとる事になりました。縁あって、僧侶の資格を取り私の息子として村の親元の家から入寺致させました。現在でも尼僧寺へ婿をとる事はなかなか障害が有り難かしいとされておりますが、当寺は、元来男僧寺である事と、今は故き私の師匠で先の高階管長貌下が娘によく言っておられた「昭和の尼僧になれ」という言葉が、私の意思を固め、区民の理解もあって、めでたく挙式をあげる事が出来ました。寺格も昇格し昔の位の法地となり、おばあちゃん、おばあちゃんとなついてくる孫をみながら、苦労したかいがあったと喜んでおります。息子も、勤めの傍の修業で教師資格取得もなか〳〵容易ではありませ

んがここ一年の中には、副住職出来る資格も取れる見通しがつき、信徒の方々も何かにつけ、新命様〳〵と特別に心にかけお世話をして下さいます。本当に有がたい事と感謝しております。

琴塚から、ゴンゴロ下駄で歩き始めてから、早や五十三年。下駄の歯も随分へりましたが、ふり返えりみれば宝林寺の仏縁という下駄の跡が増えて、「尼僧さん、ほそぼその一人暮し」という淋しい生活は、一日とてありませんでした。そして今も、おばあちゃんになるはずの教え子の一人が、孫をあやし乍ら山門を出て行きました。孫はもう隣のおばあちゃんを見つけ、キャツキャツと喜んでおります。いつの代になっても、宝林寺の山門を踏み固めて下さる下駄の跡が絶える事のないよう祈り乍ら、七十八才の私もまだ〳〵下駄の歯をへらして行こうと思っております。そしてこの幸福もこの宝林寺に住職したおかげと感謝して、人の因縁とは人間の力ではどうする事も出来ぬ大きなものと思います。

余白にと申しては失礼でございますが、

住職五十年の慶讃法要に当り、祝辞として私の氏名を織りこんだ漢詩の掛軸を加藤嘉雄先生からいただきましたのでご披露申しあげます。

石上三年面壁九
宝林住職五十年
不愧屋漏如良寛
仙客来遊蓬莱巓

前渡不動山

富樫心行

当山は真言宗醍醐派仏眼院にて山頂に安置し奉る本尊不動明王は下総国成田山の御分身なり。

開山明心律師は藤原家の末裔にして安宅関守七十五万石を領し居られし富樫左エ門の末裔坪内伊豆守の分家、前渡に領主旗本坪内家の家臣山本軍八郎藤原盛行の一子秀之助（明心）十七才の時病のため両眼を失眼し五年の間八方の医者に治療を求めましたがその功果なく暗黒の

日夜にて経過せり、明治十八年一月の中ごろ一人の旅僧（加茂郡上麻生の真言宗）が一夜の投宿を乞いたれば心よく召し入れて夕食も終り世間話をしている内に盲目の一青年（秀之助）の居ることをその旅僧が聞き古来医薬によってはどうする事も出来ない病気も信仰の力によって全快した例が数々あるから千葉県成田山へ御願いしてその御霊験にお縋りしてはとの勧めに従い秀之助はそれを信じ成田山に参籠し百日の願を掛け日々水行し二十一日間の断食行をし眼病平癒の祈願したるもその功験なく、引き続き二回目の二十一日間の行に入り都合四十二日目の満願の日午前十一時ごろ本尊宝前に最後の祈願を捧げて居る内に断食修行の疲労と衰弱のため、ついにうとうとと仮睡してしまいました。その時壇上より秀之助〳〵と呼ぶ声ありふと夢より覚めて壇上を伏して拝めば過去五年間陽光を見る事の出来なかった宝前のお燈明の光りがかすかに秀之助青年の目に映り次第に周囲の状景が見え始め一眼が完全に回復し本尊不動明王の御霊験に浴する事が出来たのである。

その後衰弱した身体の回復を待って願望成就お礼のため三回目の断食修行をすませ一応村に帰り親族一同並びに地元有志の賛同を得て成田山の御分身を受け当山に奉安する事になり、再度成田山に登山し成田山新勝寺に於て得度を受け僧名を明心と改名し明治二十三年十一月十一日当山山頂に二間四面の仮堂を建て諸人の厄除を祈る霊場となる。

翌年春京都市醍醐山より土御門天皇、建仁三年権僧正成賢御創建による豊臣秀吉公の祈願所「仏眼院」を当時の本尊阿弥陀如来（成賢の作にて七百七十年余前の作）と共に当山に移転し安置し奉る。

現在の本堂は明治三十三年に再建し、同四十三年には鐘楼堂を建立続いて弘法堂、庫裡等次々と再建され現在の七堂伽藍となれり、その後岐阜県の十名所に当選す。

玆来盲目者の開眼したる者数多あり諸病の平癒せる者又多し依って開運厄除、無病長寿、良縁幸福の守護仏として遠近老若男女の賽者絶えず今日に至る。

当山表側は岩壁（夫婦岩）にて往古はその岩の下は木曽川が流れていた。又岩壁の上には天狗の羽休め松と称し欄は傘状にして立派なる松あり（現在はその場所に天

狗尊の碑を建て毎年一回供養す）当時はその松に村人は恐れをなし夕刻ともなれば山下の道を通る者少なしと伝えらる。

西側山腹には承久の乱の供養塔が安置してある。

承久三年当時の木曽川は小山の渡しから岩瀬に当り不動山の東端に当り七廻りの渦を作り弁天池を通じ高木下切の南端の川田を通り山脇の池へ通じ三池を経て平島印食、洲俣を通り長良川に合流し下流に到る。

前渡（摩免戸）渡しは西宮寺の東南の場所に設けられていた。

承久の乱に攻めた東軍は一宮を経て関へ運ずる街道を登って来た、その関街道は関所から当山の西端を通り、ほうじろ坂を通じ各務、須衛、関へと通じていた。

当時の東山道（中仙道）は太田、関、高富、赤坂を経て京に至る。

時の関守は山田靖綱敗戦後鵜沼在に隠遁す。一宮を出発した東軍（北条軍）は前渡の渡しに至り（明治初年まであった鹿子東端渡）渡川を始む、東軍、西軍激戦し攻防に務む、東軍は五万余騎、西軍は一万八千余騎にして防戦に務めしが多数の死傷者を残して熊田に向って敗走す、又この敗走の原因は土田の渡が防戦に敗れ、土田、内田、小山、鵜沼の渡しも敗れ東軍は敗後を脅す形勢となり西軍ささえきれずと古書に見ゆ

当時の村人は西軍の食事の炊出し等に徴用され又その他の世話をし西軍を助けた。

後に時の人が西軍の霊を祭り五輪の塔を建て西宮寺（天台宗）の東に祀り供養す。「西宮寺は現在も地名として残っている」

その後西宮寺から当時のかかわりのある不動山へ移し安置す。

前渡不動の唄　（昭和二年）　加藤嘉雄作

一、人も知ったる　あの十名所
　　前渡不動さんへ詣りやんせ　詣りやんせ

二、二つ岩とて　世に聞えたる
　　夫婦立岩見においで　見においで

三、水を汲むのは　つるべかポンプ
　　ここは池から針金の道　かねの道

四、嫁御やるにも　又もらうにも

前渡不動でみてもらえ　みてもらえ

五、南ながめりゃ　木曽川白帆
　　雲に輝るが金の鯱　金の鯱

六、無理はいわぬに先づ来てごらん
　　美濃も尾張も只一目　只一目

七、何が何でも　お不動様は
　　芸者娼妓の守り本尊　守り本尊

八、山は高なし　又低からず
　　女子供に上りごろ　上りごろ

九、ここは天下の飛行機見場所
　　離陸着陸手にとれる　手にとれる

十、遠い所から　はる〴〵来るも
　　前渡不動の利益ゆえ　利益ゆえ

一、各種建物

本　堂―明治三十三年新築木造瓦葺―三十四坪
鐘楼堂―明治四十三年新築木造瓦葺―四坪九合
弘法堂―昭和三年移転改築木造瓦葺―十一坪七合
手洗屋―昭和四年新築木造瓦葺―一坪七合
庫　裡―昭和四年新築木造二階瓦葺―七十七坪
光明殿―昭和四十一年移転改築木造瓦葺―八坪

一、開山碑

開山明心律師は明治三十一年六月七日入寂されその後「開山明心之碑」は矢熊山山頂に大正二年八月建之、石碑にて高さ二メートル、開山像は当山開山明心律師ゝ写像にて木像、入寂と同時に製作たれ本堂内陣に安置す。

一、忠魂碑（乃木希典書）

日露戦役忠魂碑は日露戦争によって戦病死されたその供養の為明治四十五年高さ三メートル直径一メートル程の鉄塔の碑を建立。其後大東亜戦争の為金属回収により供出す。戦後石碑に再建される高さ二メートル五十、忠魂碑の裏には戦死者、戦病死者の名前が刻まれている。

一、十名所碑

当院は開山以来信仰の山、風光明媚にして昭和二年岐阜県の十名所の一つに選ばれ同年十月に十名所の石碑を建立、高さ二メートル。石碑の題字は当時の岐阜県知事、

一、不動山の夜景

山頂より四方一望できる景勝地にして東は犬山城、南は木曽川の清流に名古屋城、西には岐阜城と北は各務原

飛行場が手に取るように見る事ができる。

又この山頂より眺める夜景は四方八方大小色とりどりの明りやネオンの光りが誠にすばらしい天下一の眺め、尚眼下に見える木曽川の清流に映る月は又格別の夜景となる。現代語の「百万ドルの夜景」そのものである。百聞は一見に如かずとか。是非一度おでかけください。

古　墳

加藤嘉雄

各務原台地にはいつ頃から人間が住み始めたのであろうか。いま、確実に判っていることは、現在の人類と同じ程度まで進化した人々が、一万七～八千年位前、洪積世といわれる時代の最後の氷河期の終り近くに、この地方各務原台地にパラパラと住んでいたというそうです。六軒や星塚出土の茂呂型ナイフがそれを語っています。

彼等の生活は、旧石器時代という段階にあり、それは土器を使用する時代の前にあたるので、先土器時代と呼ばれたり、無土器文化時代と呼ばれたりしています。彼らは、生活に必要な道具類はすべて手近かにある木と石で作っています。彼等はまだ、石をみがいて形をととのえることを知らず、打欠きという技法でさまざまな道具を仕上げています。

無土器文化時代の人々の生活は狩猟が中心です。従って、石器もそれに役立つように発達してゆきます。また彼等の社会は、彼族の集り程度の小集団にすぎなかったようですが、彼等は丘陵上とか山麓などに生活していたことが多く、そられの土地から発掘された石器類は、彼等がそれで獲物を倒し、皮をはぎ、料理をし、木をけずり、或は土を掘ったりしたことを示しています。

しかし、やがて氷河期が終り、沖積世に入ると、彼等は新らしい道具を発明します。土器がそれです。そして彼等の狩猟の生活は続き、従来用いた石のやり先をつけた手ヤリや投げヤリのほかに、狩猟具として更に便利な弓矢を用い始めるようになります。

また、氷河期が終わって海水が陸地の方へだんだんおし寄せてくると、彼らは、その中に無限の食糧のあることを発見します。海につづく河川にも同じものがあることを発見します。いままでの狩猟や木の実採りの他に、漁猟が毎日の大切な仕事として加わります。丸木舟を作るために、両面をみがいて鋭い刃をもった石斧も作られるようになり、彼等はそれで大木を伐り倒して、中味をえぐりとって丸木舟を作ったものです。やがて建物といえる程の家らしいものを建てられるようになります。こうして磨製石器の使用から新石器時代が始まります。土器の製作も一段と進み、縄目の模様をつけて素焼にした縄文式土器が誕生します。

「あっこれは土偶ではないか。」

「ここに石斧が出た」

各務原台地の各所にこんな声が響き出したのは昭和四十年前後で、各地の山麓が住宅団地に開発され始めてからです。

長塚の手力雄神社の社殿の左右裏手にある二つの古墳は、横穴式石室をもつ古墳の好例です。丘を背後にし、傾斜線上を登りつめた位置にある円墳で、社殿を中心にはさんで東西に位置し、南の口を開いて石室が露出しており、容易に石室内部の状況を見ることができます。

東の古墳は石室内部に封土の土がくずれおちて測ることができませんが、西の古墳の封土は直径一八m、高さ約四mです。石室は入口から奥壁まで一〇・五mあり、これが室と通路に分れています。道路の巾は一・三m、高さは一・七mです。室は巾一・五mで高さが二・一mあります。東の古墳も大体同じような型です。

鵜沼三ッ池地内の炉畑地区においては、市教育委員会が乗り出して、炉畑地区縄文時代竪穴住居趾の発掘調査にかかりました。最初に予想された住居趾層の下に更に二層の住居趾が存在することが分明したため、日程を十分かけて調査しました。この発掘調査は、三層にわたる異った住居趾であることがわかり、各務原台地における縄文中期から晩年に至る間、即ち今から四千年以上前から二二〇〇年位前までの石器時代人の生活内容を明らかにすることができた点で大へん有意義なものでした。

ここの土器は加曽利E式のものです。この他各地の土

器を並べると、大伊木丸子山南麓から穀粒押型文、各務野防風林北部から爪型沈線文、三軒屋中の島から条痕文六軒、三柿野から撚糸文、前渡から撚糸文、等々の模様をつけた土器片が出ており、その他に那加地区では、雄飛丘、蘇原地区では東島などで土器片が発見されています。以上の模様のうち、押型文は文様を刻んだ木の棒を土器の面に当てて回転して作った模様であり条痕文は赤貝の腹線で擦ったり、木の枝を束ねて撫でたりして作った模様です。

縄文式文化のはじめの頃、人々が人工的な住居を作った形跡は明らかでありません。当時は自然の洞窟や岩蔭が住居として利用されたことが多く、山県郡美山町谷合の九合洞窟などはその代表的な一例であり、九合洞窟に人間が住みついたのは今から凡そ七～八千年前と考えられています。

次に古墳について調べてみます。最も古い時代の古墳の実態は、今日まだ不充分にしか知られていませんが、それは小高い丘の上に、自然の地形を利用して築かれているのが一般で、外形は前方後円墳が圧倒的に多く、規模も比較的大です。発生期は三世紀から築き始められたようですが、四世紀後半に造られたと思われる古墳は、全体として前代の立地を継承して平野に面した丘陵の突端に営まれ、同様に墳丘は自然地形を利用しています。この時期にようやく畿内以外の地域に古墳の築造が始まったと思われ、しかもそれは古代の交通路に沿って拡がっているのが特徴です。五世紀に入ると古墳は平野に築造されるようになりますが、地方においてはなお丘陵上にあるものが多いようです。

各務原市内の桐野に柄山古墳、坊の塚古墳などの前方後円墳が、古代の大和とこの地方を結ぶ交通路であった東山道沿いに現存しています。柄山の西琴塚には有名なしかも代表的な前方後円墳がありますが、これが柄山の古墳が平地へおりたのであります。

さて我が校下は各務原台地の南端ともいうべき地域で南へ西へと拡がる平野を見おろすところになります。従って三軒屋・長平山・荒井山・脇山続いて三井山へと南側一帯が古墳地帯といえます。前にも述べましたように三軒屋の中の島から土器が発掘されています。長平山か

らも不動山裏・荒井山等各所から土器や石斧が発見されていますが、最近山脇町の西洞山で古墳群が発掘されていますので、それについての記事をいただくことにいたします。

西洞山三井延命地蔵尊の由来

小島良一

昭和四十年、当時山脇地区は戸数僅か三十二戸の小部落であった。筆者は部落の発展を意図し先ず人口の増加を図る為、西洞山々麓（当時大佐野町奥村貞雄氏所有）を電信電話工事者建木長市氏に斡旋誘致し、早速宅地造成に着手した。折柄ブルドザーも挫折する程の岩石に遭遇し不審に思って調べた結果古墳であることが判り建木氏の驚きは一通りではなかった。氏は直ちに作業を中止し感ずる処あって出身地岡山県へ赴き神宮寺住職毛利正明僧正（天台寺門宗大津三井寺勧学院教学部長）を訪ね、地蔵尊建立についてその指導を受け無縁仏の供養を発起した。時の管長大岡俊謙猊下もこの事情にいたく感激され管長御親修による多くの高僧と共に昭年四十一年四月二十九日、採燈大護摩供の開眼法要が盛大に営まれその名も三井延命地蔵尊として、附近一帯の古墳群に眠る精霊を慰め且つ冥福と当地の繁栄を祈念した。この地蔵尊祭祀に当り地許有志は元より各地から数多くの協賛を得て、二年目には地蔵堂を、更に三年目の法要には梵鐘と、相次いで建立され見るからに寺院の景観を備えるに至り、朝夕に響く梵鐘の音を聞く郷土の人達の心には、深く祖先への思慕の念を想起しない者はないと考へ思わず今日ある倖せと感謝を捧げ合掌する。これ至誠仏心より発する美徳として後世に記念すべき行事と思われる。地許協賛者としては護持会々長時の市議会議員尾関静雄氏、顧問には衆議院議員武藤嘉文先生始め数多有志の協力があり年々繁栄しつつあることは誠に喜びに堪えない。尚今年は七周年の法要に当り特に記念行事として、護持会々長尾関静雄氏を始め関係役員並に願主建木長市氏等の会議に基き、永代古墳の保存と諸霊を護持するため更に六

体の地蔵尊を刻み各々古墳上に祭祀することになった。同地蔵尊は特に病気平癒、火難、盗難予防の霊験あらたかにして地許は勿論遠く名古屋方面にも多くの信者があり、毎年四月二十九日を縁日として盛に法要が営まれる。筆者も又有難い仏縁に対し深い感銘を受けて日々参詣して居る一人である。

各務原市教育委員会では昭和四十一年四月、名古屋大学の橋崎彰一助教授の指導の許に同古墳群の内の四基を発堀調査した処、この古墳群はいずれも直径十メートルの円墳で、山の斜面の一部を削りとった処に構築された二段築成の墳丘であり、一段目の上に石室を架築していた。出土品は杯、鍛（ヤジリ）、刀子、鉾、高杯（タカツキ）、提瓶（ヘイテイ）、壺、甕、直刀、轡、環等約三百点あり、橋崎助教授の鑑定により、六世紀半（今より約千三百年前）のものであることが判明し、考古資料として蘇原公民館に展示されている。

木曽川のあばれ

加藤嘉雄

木曽川の氾濫やそれから来る被害を古書から拾録してみましょう。

美濃国各務郡は広野川（今の境川）を以って尾張国葉栗郡と境す。河道変遷につれ両国民利害を異にし常に相争う。清和天皇の貞観年中、各務郡大領各務吉雄等尾張国と復界を争う。貞観七年の冬、尾張国では斯様に言っていた。

「昔広野川美濃国を流れし頃は百姓に害なかりき。然るに、先年河口を擁塞して総てこの国に流れ落つるようにしたため、雨水に遭う毎に百姓は巨害を被ることとなれり。」

尾張国は太政官に請いて、河口開塞を許さる。果せるかな。翌八年七月尾張の国は広野川の河口堀開工事をなして旧流に戻す。ここにおいて各務郡大領各務吉雄と厚

見郡大領各務吉宗は歩騎兵七百余人を率いて河口を襲い郡司を殴打し、史員を殺傷し、河水に血を流し、野草膏に窮うの惨事を展げたりと。

(註) 清和天皇貞観七年は皇紀一五二五年で今から一一〇年前

関ヶ原役後、徳川家康その子義直を尾張に封ず。戦勝の余威を駆り、西国の諸大名に命じて、軍略、政略水防上の見地より、犬山以南海西郡弥富に至る十二里に亘る大堤防を築造せしめたり。之を御囲堤防と称す。馬踏概ね六間乃至八間にして、最大なるものは堤敷二重間に及び、鞏固なる護岸工事を施し、所々の要地に二重堤、三重堤を設け、而して美濃の諸堤は御囲堤防より低きこと三尺なるべしとの制限を加えたり。為に築堤以来三百年、尾張国は未だ破堤の歴史を有せず、常に五穀豊穣住民はその堵に安んじ鼓腹して楽しめり。之に反して美濃は幕領、藩領、旗本領等大牙錯綜し、諸候は各自に局部の治水策を講ずるのみにて、全体的統一を欠き、旦つその諸堤は修築上厳重なる制限を加えられ、改善を施すこと能はざりしを以って、年々水害の厄に悩めり。

時は移って皇紀二四五八年光格天皇の寛政十年のことである。

三月晦日（五月十五日）から天空異状を呈し四月六日夕方より強風雨、七日夜より暴風雨となり、八日各河川洪水となる。木曽川は恵那郡坂下村で耕地八町歩余を流して河川と化し、加茂郡で流失家屋多出、死傷二十余人各務郡、羽島郡水量一升二合、堤防平越しとなり前渡より笠松まで八ヶ所の破堤をみる。この頃尾張方も危険に頻せりと、家屋人畜の流亡多しく、羽栗郡以南南桑名まで一面の泥海となり、前代未聞の大洪水なりと。

皇紀二五二五年、孝明天皇慶応元年五月十七日（七月三日）十五日暮れ六つの頃より三日間大豪雨。
木曽川恵那郡にて堤防四〇〇間（七二〇m）破壊。
可児郡にて流失家屋一六戸。
加茂郡にて流失家屋四六戸。
各務郡前渡村にて水量一升二合。破堤一二〇間、流失家

屋二戸、死者一、被害田畑二十余町歩。
下切村にて破堤九八間、流失家屋二五戸、死者一六名。
沿岸以西数十ヶ村一大泥湖の如く、流家、人畜の死傷多し。浸水家屋全部というべし。

美濃災害史による木曽川水害年表（月日は大陰暦らしい）

治世		場所	被害
称徳天皇	神護景雲二年八月九日	木曽川（鵜沼川）洪水	
文徳天皇	斉衡元年七月二七日	木曽川氾濫	
正親町天皇	天正一四年六月二四日	木曽川大洪水（今の川筋となる）	
後陽成天皇	寛永三年五月一六日	前渡堤防破潰	
明正天皇	寛永一八年　月　日	前渡堤防大破潰	
後光明天皇	慶安三年九月一、二日	美濃大洪水	
後桜町天皇	明和二年八月三日	木曽川長良川出水	
光格天皇	天明二年六月二三日	各務郡大水　所々堤防破潰	
同	寛政一〇年四月　八日 七月一六日	大洪水前代未聞破堤各所	
同	文政十年五月	前渡破堤	
孝明天皇	安政元年六月二一日	木曽川大水	
同	同　八月	木曽川出水前渡に流家あり	
同	慶応元年五月一七日	木曽川大洪水破堤数ヶ所　前渡一部及び下切全部を押流し遠く加納輪中にまで水害及ぶ	

「前渡切れ」の為、境川沿岸にも及び、藏前、切通、細畑、下川手、茜部、高桑、佐波等の破堤三七ヶ所以上なりきと。

明治天皇	明治一四年五月六日	木曽川大出水
同	同 一四年六月一七日	木曽川、長良川大洪水　諸所破堤
同	同 九月一二日	諸所破堤
同	同 一七年七月一六日	大洪水各川出水
同	同 一八年七月一日	各川出水大洪水
同	同 二一年七月二九日	暴風雨各川出水
同	同 二六年八月	各川出水、山崩の被害多し
同	同 二八年七月二九日―八月	各川出水
明治天皇	同 二九年七月二〇日	大洪水、北島全両内野大部
	九月一一日←	長平大部浸水惨害甚大なり
同	同 三〇年九月九日	大洪水
	九月三〇日←	被害甚大なり

私の幼少の頃、度々大洪水（大水といった）があり、水防員が警戒に当り、父は大八車に米数俵を積んで山屋敷に預けるといい、車のあとおしをしたことがあった。

不意の大洪水には丸太材木が川一ぱいに流れた。川の広さは、草井から常貞寺前の遊水地をなめつくし、堤防際までであるから一〇〇〇米にも及ぶであろう。その川幅全帯を、洗い樋の中に箸を入れたように、おしあいへしあいで材木が流れるから見事なものだ。水泳の上手な大人は、その濁流に飛び込んで、岸近く流れる材木を拾い集めたものだ。「早く大人になって泳ぎ、流れる材木を抱えて岸へ来たり、太いのに跨って揚々と岸に着く男性になりたい」とは私一人ではない、堤防に居並んで川

面を見ている人々の気持ちだったろう。

こうした洪水が引くと各所のたまり池に小魚が一ぱいいる。それをとりに行くのも又面白い。川辺の人でなくてはの興味である。四斗樽に一ぱい小魚をとったという話もあった。

秋から来春にかけて筏が下る。帆掛舟が上る。実に長閑な、風雅な、木曽川である。古来学者の記事は牧挙に暇なしと結びます。

各務原の今昔

鏡野

加藤嘉雄

日本で一番古い本といわれる「古事記」に「三野」と書かれているのは「美濃」のことに間違いはありません。三野とは「大野（太田北部で加茂野）」「青野（大垣北方西方地帯）」「鏡野（各務野）」の三つの野のことです。

この各務野台地が生れ始めたのは今から約五～六万年前のことで、木曽川が地球上に生れたのは一千五百万年前と、とてつもない遠い昔のことだと地質学者はいっておられますし、各務原市内の各所の古墳から発掘せられた石器からも、このことが推定されます。

こうした上古のことについては

昭和四十五年六月十二日発行
発行所　各務原ロータリークラブ
著者　小林　義徳先生

各務原の歴史に詳しく書かれています。

このたび私が書こうとしているのは、前記の小林先生の歴史とは別に、比較的新らしい、私なりに調べた「ここ六十年の変遷」を主体として筆を執ることにします。

さて、鏡野とはその字の示す通り、鏡のような平坦な野であったことは説明の余地はありません。地名の字におきかえて、各務野としたまでです。各牟と書いたり加々美と書いたりしたことも古書には見えています。

信長と各務野

永禄十年（一五六七）約四〇〇年前、織田信長は稲葉城を陥れて、斉藤氏を滅し、小牧城から岐阜城に移って

きます。信長は井ノ口の地名を岐阜と改め、この岐阜城を全国統一の最初の拠点とします。難攻不落を誇った岐阜城を攻める時、手力雄神社（長塚町にある）に戦捷を祈願しました。見事勝利となったので、お礼に一、三〇〇町歩を奉献し、家臣赤座七郎右衛門政景に与え、佐々木郷（さらきのごう）に住まわせました。

この一、三〇〇町歩は現在の新加納以東那加町一帯と各務原西半分位の地域です。各務野は新加納から東鵜沼までの東西三里（十二キロ）南北一里（四キロ）の青草の原である。中仙道（国道二十一号線）が中央であることは北、蘇原に野口の地名が現存する野の入口と解して了解していただけることである。中仙道の一里塚が、新加納、六軒、羽場に、宿場が新加納と鵜沼にあったところからも、広莫たる野原といえます。人家のない草原、ごたぶんにもれず「鼠小僧」という追いはぎが居たことは有名です。

こうした黒ボク土の草原ですから、夏、蚊の群生もやむを得なかったことでしょう。旅人が疲れはてて、真裸で一夜をあかしたというのです。夜明け近く、他の旅人がこの寝入っている人を見て、「蚊か蓑か」といってゆり起したら、「ここがカカミノか」といいながら、身体中をばりばりかいたというのは、うそのような伝説ですが、蚊の多いことは文化の進んだ今日でも名物の一つです。

昔のはらっぱ

東西には中仙道があるが、南北の横断道はない、といって通らぬわけにはゆかんので、目標をきめて三人五人と歩くうちに、道ができる。ところが百曲りという溝がある。狭い所では飛び越せるが、広い所ではそうはゆかん、といって道板を持ってきて橋をかける人もない。原のあちこちに点在する小松林から二三本切ってきて丸太橋を架けるのがせきの山、廻り道をしたり、飛び越す所を見つけたりで、婦女子や子供はまずまず通れなかった。裏面には何者かが出るとうわさされていた。

雲雀がよくなく。巣を作る安全地帯だから、雲雀の発生地であることは論をまたない。蕨がよく出る、中央部よりも南北側と百曲り溝の沿岸、そして筆草（ふでそう）が咲く。紫色の可愛い花。石持草（いしもちそう）も咲

く。黄色な可憐な花と形容します。ところが今は筆草も石持草もさっぱり見付からない。いつの頃からかどうしてか絶えてしまったのでしょう。飛行機がきらいかも知れん。ガソリンの臭が絶やしたのかも知れん。してみると公害にやられた、とも言えないことはない。秋になると所有権のある那加でも佐良木（今の西市場）の農民が草刈りに来る。朝露のうちにと夜も明けきらぬ四時か五時頃から「シャキッシャキッ」となぐり刈り、昼前刈って午后はかき集めて束に結い、荷車に山積みして、夕日の落ちる頃家路に向うのです。何十台もの荷車が続きます。ほんとうによく働いたものです。この枯草は小笹が多くちがやも混っています。春先き「甘藷床」になくてはならぬ大事な芝なのです。各務野一帯の土質は黒ボク土で水田には適しませんが甘藷には最適なので、各務野いもの名声を博し遠く大阪方面に売り出されました。トラック時代とは夢にも知らない当時の人は、荷馬車で大阪がよいしたものです。名古屋へは自分の荷車で「ガタゴト、ガタゴト」いわせて引いて行き、売り上げ金二円か三円で大威張りです。終戦後米の無い時、京都、大阪方面の人が列をなして甘藷の買出しに来ました。捨てていた屑藷まで切干しにして売りました。この時ばっかりは藷成金と、続いて澱粉藷となって沖縄だ、いや農林一号だ、そのうちに高系がうまいと多収獲を競った百姓も、最近のように「石焼藷」が少々売れる位では、藷成金の夢もまたと見ることができません。藷作るか。堀るがえらいからやめた。五寸人参が堀るに楽だからなァ。こんなふうに時代は変ります。名物藷もさっぱり、という始末。

砲兵演習場

明治九年、各務原のうち、三井山から北東にむかって二十軒まで、巾一二〇間（けん）というから約二二〇米の地を陸軍省へ割譲します。この地は面積にして約三〇町歩。名古屋鎮台（第三師団）の砲兵演習場として用いられ、一般に大砲場といっています。二十軒南方に大砲を据えて三井山にむけ発射します。三井山はその昔三井城が築かれていた所で、頂上の本丸下に三段の石垣があって、その石垣が目標であったようです。

明治二十二年、演習場の拡張で残りの中仙道以南全部を陸軍省へ売却しています。然し前項にあげた「苅草」は前の権利者にあったようです。この頃の砲兵演習場は当時の各務郡那加、更木、前宮、鵜沼、蘇原および羽栗郡中屋の六か村に囲まれた三九〇余町歩に及びます。

しかし日清戦争ごろから大砲の威力が増大したため、砲弾が三井山を越えて、大佐野、小佐野の民家に飛びこみ犠牲者を出したので、危険極まりなし。他所へ変ってくれ、となって砲兵演習場は豊橋の南方、高師原に移動したようです。

原の北側にある野村、三ツ池は前渡小学校に通っていたが砲兵の演習で危険だから、校下関係をやめたと小学校沿革史にのっています。

砲兵演習場が移ったと思ったら、今度は騎兵の演習場です。明治の末期から大正にかけて、毎年八月小学校の夏休み中に、小学校を兵舎にかり、午前中は原で演習、午后は木曽川で水馬演習です。大休二週間の滞在。連隊本部は永井良一氏宅、後に桃春院、医務室は木立が多くて涼しいからと常貞寺が持ちきり。私の離れが経理室に充てられた。馬けい場は木曽川右岸堤防の松林、常貞寺から二軒屋の水防倉までである。この頃は水防用に非常時松を切り流しにして堤防を守るという考え方で松を植えたものだが、今は木を植えると台風に木がゆすられて堤防が弱くなるという見方で堤防は丸裸になった。

不動山の麓、市杵島神社（俗称弁天様）の南一帯の川原松林を馬けい場にしたこともあったが、民有地で馬が松皮をかじるなどして枯れると小言の出たことも聞いている。

騎兵特別大演習。明治四十二年十月大正天皇が皇太子殿下であらせられる時だった。この原附近一帯で騎兵特別大演習の最後の一幕がくり広げられ、尾崎山を御野立所と定められた。警戒が厳重で庶民は原へは出られず、荒井山西部に集まった。いわゆる拝観場というわけ。馬上の皇太子殿下の御英姿はさっぱり、皇太子旗がはるかかなたに見えたかしらん。それはどうだったかしらない。

騎兵集団の突撃か、すごい銃声と土煙、その銃声が何と聞えたか、騎兵さんが突撃の時鞍をたたくんだ。パンパンパンパンの連続だ。機関銃の射撃ですよ。始めて聞

いた農民どもは、鞍をたたくとは考えたね。又ある人は、どこかでだれかが莚をたたいとる、と想像したとさ。百姓の秋じまいに、二人で莚を引張りあって細竹でたたいて、土ぼこりを掃いおとす時の音がさも似たりというところから、莚をたたくとはこれも亦妙なりといいたい。

このお野立所になった尾崎山は、御成山と改称して記念碑を立てた。今では記念碑と書いた石柱どころか山もけずられて姿を消してしまった。

明治四十一年、野一色に歩兵第六十八連隊が創設せられた。それからは歩兵の演習場となって、毎日小銃の音がする。雲雀の名所もそうではなくなった。

飛行機がくる

大正時代に入ると、各務原は飛行場として大きく浮き出てきます。大正四年（一九一五）頃から埼玉県所沢に航空隊が新設されると、次いで各務原に飛行場が来ることになりました。各務原東部というよりは鵜沼地区といった方がよい位です。飛行場ができる、人夫に来い。スコップをかついで弁当持で出て行く。丈夫な若者はトロッコに乗る。普通人夫は日給八十銭か八十五銭、春さき雲雀の鳴き声を聞いて「おれたちも雲雀のように日一両くれんかなァ」といったとさ。雲雀のピーチクピーチクが「日一両日一両」と聞こえたそうだ。この人夫を土方（どかた）といいます。

翌六年十二月に所沢の航空隊が航空第一大隊と命名され、その翌年即ち七年十一月に航空第二大隊が誕生し、各務原（鵜沼）に移転してきます。航空隊は工兵に属し師団長の管轄で、転科する飛行士は、歩兵、騎兵、砲兵の襟章色のままです。

飛行機は「モ式」（モーリスファリマン）です。ものの十分か二十分が耐空時間です。日の出前後の無風状態の時に飛びます。午后は通常風が出るので飛びません。丁度岐中二年生の時です。夏休みになるのを待って、岐阜市方面の親友五人を誘い、一泊させて早朝に離着陸を見に来たものです。その中には現衆議院議員野田卯一君も含まれています。野田君は加納町で入学当時からの親友、今以って親交を続けています。こんな一こまも飛行機の初期の笑い話です。

古井戸に二泊

百曲川の一部分に、古来から古井戸があった。魔の井戸ともいう。頬白坂から東北方の二十軒に通ずる近道で平素は殆ど人通りのない経路、その道の南側にある。直径二m位深さ五・六mもあったかしらん。大正末期には雑木の小さいものや薄などが生い茂って、誰も寄りつく者はない。この井戸に落ち込んで二泊し三日目の朝這いあがって、無事家に帰った奇人がある。その時本人から聞いた苦心談を紹介しましょう。

時は大正十三年十月、当時前宮村役場吏員田中太蔵氏その人である（昭和十五年亡）日露戦争従軍の勇士で功七級の金鵄勲章拝受者、戦後警察官になって飛騨、東濃方面に十幾年勤務し巡査部長に栄進後村に帰られた豪傑肌の人である。酒豪であることもあまりにも有名であった。

各務村役場で吏員打合会が持たれ、夕食に一杯出たことは間違いない。十分ご馳走になり、羽織袴下駄ばきで勿論徒歩、ご機嫌麗わしく二十軒から各務野にさしかかったがさて道がわからない。きらめく星空でぼんやり見える頬白坂を遠い目標にして、鼻唄豊に、てくりてくり。

ガサガサ！　しまった。　といった頃はもう井戸の中。炭酸ガス充満でなかってよい幸。落ち着きはらった田中さん、どんな手を打つか？

「この真夜中にもがいてみてもしょうがない。」

高鼾で寝てしまった。目が覚めた頃には酒もさめている。薄暗いが夜は明けている。懐中時計を持っていないので時間はわからん。煙草と燐寸はある。

さあ如何にしてこの井戸から出ようか？兎もよじ上れなくてかここに一匹死んでいる。

「煙を挙げて助を求む。」

枯葉が積っている。上縁は二m位だが現在居る底ではがまになって三m以上もあろう。夕べ帰宅していないから、誰かが探しに出てこの道を通る。不思議な煙と中をのぞき見るにちがいない。枯葉を細々と焚いた。大きな火にすれば熱くて居れなくなるし長い時間焚かなくてはとも考えたからだ。

「早く煙を見付けてくれればよいがなァ。」

呼べど叫べど外へ聞える筈はない。大声を出せば喉が

かわくし体は疲れる。もう昼過ぎだろう？枯葉はぶすぶすくすぶって煙は立ちあがっている。一人としてのぞいてくれるものはない。

「助を求めるより自力だ、自分で這い出るより外に道はない。やるぞ。」

三m位上に何かの根株がある。枯れてはいない。小枝が沢山出ている。その上二m位の所にも何物か出っ張ったものが見える。

「あの根株まで先ずあがり、次に上の何物かによおのぼれば、頭が出せる。」

決心はついた。ジャンプしてみよう。あの根株にとまれるかな？　まてまて、飛びそこなって落ちたらいかん、と羽織と袴を脱いて落ちた時のマット代用にした。気合を入れて飛びついた。満州の戦場で飛んだ跳ねた時のようにはゆかん。あれから何十年も過ぎた老境の我であることに気がついて、ジャンプは一回でやめて、又しばらく考えた。次の案はこうだ。

「あの根株が一番頼みになる命の綱だ。あの株に縄をくっつけてよじのぼる。そこを足場にして次には薄の株でもつかめば出られる。」

煙草一ぷく、袴の紐をじっと見つめた。この紐と兵児帯では足りない。袴はセルだから純毛。袴を引き裂いて材料を作る。さてと布縄をないはじめた。何回も引張ってみてはなう、五m位できたようだ。あの株をまたがせるのが又大へん。もううす暗い、晩になったかな。でもすかして見える。息を殺して、静かに静かに、のばしてゆく。くにゃっと曲っておちる。又くりかえす。

しだれ柳に飛びつく蛙
飛んでは落ち落ちては飛び
おちてもおちても又飛ぶほどに
とうとう柳に飛びついた

「気長にやるんだぞ。最善の策だ。」

自分で自分を納得させ、落ちても曲っても、何十回でも何百回でもの堅い決意は、とうとう成功して布縄は例の株をまたいた。急ぐな、あわてるな。引張ってみた。

「大丈夫だ。あの株まで。素早くあがるんだ。」

おもむろに、身を軽くして（気分だけ）、然もすばやく、無我無中で、布縄を引張り、よじ登った。片手が根

っこにとまれた。縄がゆるむ。縄をくわえた。どう操作したか？身は根株の上にあり。しめた。すぐ頭に襲いかかる何物かがある。

「この根株がゆるんでこけたら、それこそ虻蜂とらずでおちてしまい、何にもならぬ。早く上えあがれ、飛び出よ」

布縄をたぐりこんで、薄の株か何かに巻きつけることができた。今度は近いというか短かいというか早く目的が達せられて、間髪を入れずといおうか、一気に外え這いあがった。大きく外の空気を呼吸しつつ仰いだ。澄みきった大空に星が一面まばたいている。東の空が何となく赤味を帯んでいる。もうじき夜明け。

文字による表現がまずいので、この一幕の田中さんの意中や作業が十分書きつくされないのが残念です。どうか読者の英知にお委せいたします。

スミス飛行機

これより一年前、五月でした。スミス飛行機が岐阜の歩兵第六十八連隊の練兵場を離着陸場にして有料で見せました。空にあがって飛び宙返りをするのを金を払って見るなんておかしい。無料でちっとも高い所で見ようと前一色山は人の波でなく人の山を築きました。有料の者は豆自動車でスミスが愛嬌よく場内を一周したのが見えたのと目前に離着陸を見たというのです。団体で入場料十銭だったと記憶しています。今の百円かしらん。

補給部

時を同じうして。野村を中心に原の北側に陣取った。

陸軍航空本部補給部各務原支部

の設置が始まります。所沢の本部から職工が移住します。隣村からもどんどんは入ります。本村からも大勢職工になります。大体的な農家もなく、家内工業の機織（はたおり）も不況で、補給部へ補給部へと職を求めますが、拡張又拡張で猫も杓子も、志願者の人物に合致する職場へ入れてくれます。それでも尚不足するので臨時人夫を使ってくれます。その供給を私が一番先に請負ました。大正末期から昭和の初期です。在郷軍人分会員が応募します。会員は小遣がとれ、分会は手数料がはいって経常費に廻るといういい調子です。二十人三十人のうちはよ

かったが、五十人以上になると、こちらが人不足となって応じきれないので、蘇原村にも供給の一部を依頼したが、時には本株をとられたこともあった。

昭和十五年頃か、

陸軍航空廠各務原支廠

と看板がぬりかえになる。戦争中で在郷軍人である職工は応召する。輸送業務は激化する。人手不足で困窮状態に陥ったという話もあった。

二十年の春からは何回となくB29の空爆を受け四離減裂、減裂の表現はひどすぎるが、南に北に山奥にと、資材や工場を分散せざるを得なかった。空襲警報だ、そら避難だと職場を離れてばっかりいては、戦線からジャンジャン飛行機の補充たのむと電報がはいっても、戦場化している航空庁の現状から、OK何月何日何十機空輸する、との返電が打てぬ、みじめさであったのは事実です。

終戦後は人は全部家にもどり、焼け残りの家屋は荒れに荒れ、邪魔物扱いの資材は連日焼却黒煙天を蔽うの状態でした。

フランスの教官

昭和八年の秋から九年春にかけて、フランスから飛行機操縦教官を招聘し、一行は所沢で、一行は各務原で実地指導をします。機関の職工はイタリヤ、フランスの洋航帰りのパリ連中です。舶来飛行機はニューポール、スパット、ソッピース、サルムソンです。フォール大佐が団長で各務原へは二十名位来ていました。デッケル中尉と名を覚えています。岐阜市内の金津が宿舎で中仙道をオープンカーで通います。沿道は日仏両国旗を飾って、歓迎し、フランス国歌（アロンザファンロ……）をおぼえました。今でも大体歌えます。

練習将校の内北川中尉と依田少尉が祖母の家に下宿しましたので、心安くなる、仲よしになる。飛行機の話を聞きに行く。兄貴の気持ちで接近する。私が中学五年になった四月操縦術卒業だぞといっていました。北川中尉に乗せてくれ乗せてくれと数回たのんだようだが、許されるはずはないのに、大胆な中尉は十五日卒業だ。十六日学校の帰りに飛行場へ来い。私は秘密にしていた。約束通りサルムソンの準備をして待っていてくれました。知っている職工に乗せてもらいバンドを締めてもらった。

私は後の座席、手も足もどっこにもさわるな、プロペラがまわり出した。一段高い音で転回する。車輪の痕留が外される。滑走路へ進む。両翼にとまって来た職工は退く。西へ向って走り出した。地を離れた。下を見ると三井山より上へ来ている。青い麦畑、黄色い菜畑、赤い紫雲英、木曽川の上を犬山に向っている。左へ旋回した。痛快だ。操縦中の北川中尉が私の方をむいて何か言ったようだ。爆音で聞えない。私は外の景色、下の景色を無中になって見ている。音が変った。空が見える。身体が何かもまれた感じ。爆音がはたととまった。墜落かと思うまに、爆音がしだした。何だ。身体がぐらぐらとした。前進方向の景色が変った。又おかしいぞ。こんなことが三四回続いた。犬山の町並が大きく見え出した。伊木山が左の窓近く見えたと思うまに滑走路へゴツンゴツンと着陸したことを感じた。腕時計で二十五分間空中の人になっていたことが判った。嬉しい限り。地を舐って定位置まで来ると、安全飛行を見守っていた職工連は飛行機をとりまく。私をおろしてくれる。みんなが私の顔をジロジロみつめている。「強いなァ」。何のことかわからん。今までに乗せてもらった機関の職工は青ざめてヘトヘトフラフラになっておりてきたのに、加藤さんは平気でおり歩いている。こんな彼等の話合いが耳にはいった。

北川中尉は高知県出身の人、大尉時代に教官をしていて墜落の事故にあったが右足を痛め、頭もバーになったという。時は移って支那事変の時、南京飛行場で再会した。依田少尉はあの時から数年後台湾で殉職した。

航空第一大隊の設置

大正八年から各務原の西端、三井山の北側に航空第一大隊の設置が始まった。村のみんなが土方に行く。夏休みに私も行ってみた。スコップ使いが下手なことが監督の目にとまった。翌日から事務所へ来い。その事務所は「第三師団経理部各務原派出所」と看板があがっている。青写真を焼く仕事を命ぜられた、又書類の浄書も教わった。夏休みの半分以上アルバイトをやった。現場監督の屋員（こいん）さんに連行して、格納庫内の飛行機にさわってみることが嬉しかった。

航空の名は大正十一年に飛行と改められ、同十四年に大隊は連隊に昇格して飛行第一連隊（西）飛行第二連隊

（東）となり、一連隊は戦斗機、二連隊は偵察機の担当で訓練を始めます。

東に飛行第二連隊、西に飛行第一連隊、北部中央は補給部、南側は長平山、荒井山、脇山、三井山によって、くっきり境せられ、日本一の大飛行場となります。岐阜衛戍病院各務原分院が一連隊の西に、各務原憲兵分遣隊が補給部の西隣に、戦争初期に飛行団が憲兵隊に隣接してできるなど各務原は航空一色に塗りつぶされます。

工場の進出

大正十二年には、川崎造船所各務原飛行機製作所が発足します。関係者が神戸からどっと流れ込みます。蘇原村長は受入体制として柿沢附近に旭住宅団地を建設し、那加村長は雄飛丘住宅団地に移住を引受けます。

三菱飛行機製作所、中島飛行機製作所も川崎ほどの大規模ではなかったようですが、大きな格納庫を建てて、軍用機を製作して「お買上げの栄に浴し反面一もうけしよう」と軒を並べます。

終戦、飛行機不用となった時には、大きな打撃だったでしょう。まもなく自動車工場に姿を変え数年後には、バスが飛行機の格納庫に一ぱい並べられたことを見ました。三菱、中島両工場は翼をたたんだようです。

交通機関

この広い原に南北道がないというはずはありません。頬白坂――野村道、大釜――野村道、御鍬――六軒道、下切――六軒道、御鍬――新加納道、御鍬――山下道、等を主にして何十本もあります。この道が飛行隊の滑走路拡張と共に消されてしまいます。県道だった頬白坂（長平山と荒井山の中間地区にある峠）から野村へ通ずる道路が一本だけ、かなりおそくまで閉鎖を辛抱してもらったのです。南北両方に番人が立哨していて、赤白旗を振って、通行可、不可、を指図したりして、通行人を指導したものです。時には午前中待たされた、という話もあります。こんな惨事がありました。許可を得て北から原にさしかかり、ほぼ中央まで来たら急に東から着陸体制の飛行機が来たので、西に東に逃げまどっている赤ん坊をおぶった若奥さん、無我無中で方角も何も考える予猶なしというか、着陸刹那の飛行機にひかれて即死、脊の子は無事。飛行機にひかれる。こんな惨事は恐らく世

界中での珍話であろう。補償金の話も聞かなかった。裁判沙汰にもならず、「運が悪るかった。」ですんでしまったのも昔の話。それ以来原の横断は、ぱったりストップ。終止符を打って大きく迂回させられる。軍の命令だからしかたがない。と附近住民は「あきらめてしまう」

運が悪るい
あきらめる

今では、かんたんに片付くまい。昔話としてすみか。

高山線　東海道線の支線として、岐阜駅を起点に高山を経て富山に出る国鉄が起工されたのは大正八年六月です。まず那加駅まで、次に各務原駅、鵜沼駅の開業は十年でした。蘇原駅はずっとおそく、戦事中の昭和十四年です。那加駅から補給部へ引込線が敷かれた時代もあります。

各務原鉄道　大正十五年一月に岐阜市安良田町から各務野駅（原駅は今の三柿野駅の西北方）まで、その年八月に二連隊前（今の名鉄各務原駅）昭和二年九月に東鵜沼駅（今の新鵜沼駅の北方）までの全線が開通します。名鉄各務原線となったのは大分後のことです。

この電車が高山線と大体並行しているのは、田舎としては一寸おかしいと思いませんか。計画は細畑から中山道南に出て、芋島――大野――中屋――前宮――鵜沼の線に杭打ちをしたのだが、沿道の村民は、㈠耕地が減る㈡若い者が岐阜市へよく出る、等の理由で強く反対したために、ではしょうがないと並行線もやむを得ないと、敷設したと聞いている。便利になると金儲けができん。という故人どもの考え方、働く働く、金儲け金儲け、これがその時代のいきかた、盆正月とお祭が銀白飯、あとは年中麦飯、レジャーなんて春秋の彼岸詣りの名のもとに、往復徒歩で岐阜まで出るのが上々。歩け歩け運動の必要なんてどうして考えられよう。それから自転車。今ではマイカー、次はヘリコプターか。それとも万博にあった動く道路ができるかな。

航空諸隊と隣村

補給部が設置されて、原四周の村々は失業者がゼロになった。事務家、職工、掃除夫と、頭で、腕で、体で、と多種多様の採用があるので男も女も、補給部へ補給部へと職を求め、安穏な家庭生活ができ、水呑み百姓より

遙かに有福であった。第一第二連隊には材料廠があってこれ亦地方人を多く使用してくれた。航空関係の所に勤めなければ、人に非ずといいたい程、村民は自転車を走らせた。関係工場へは岐阜方面から電車に鈴なりになって通勤する。事変が始まると、前にも倍しての増員で、隣村には志願者品切れとまでいった。

防衛協会

岐阜県防衛協会各務原支部が昭和四十年に発足し、現在一八〇〇名の会員を持ち、名実共に全国一を誇るのも前掲の航空諸隊と隣接村民とのつながりが物をいうのではないか。飛行機が飛び始めた頃は、雞の産卵率が減退した。爆音で赤ん坊がよう寝つかぬ。などの苦情が出たが、爆音が子供の子守歌に聞こえるといい出すやら、めしぼせだから文句をいうなとなるやらで、航空諸隊なくては干上りという方向に転じてしまった。この父、この兄を持った現代人は、防衛協会の入会に何の躊躇もなく、話しかければすぐ入会となる。即ち各務原のお陰で父祖は活きてきたという、血の流れをもっているからだとは言い過ぎではなかろう。

中等学校の連合演習

「飛行機も参加して岐阜県中等学校連合大演習各務原を中心に展開」

軍国色盛なりし昭和初期、配属将校の派遣されている県下中等学校

岐阜地区　岐師、岐中、岐商、岐農
大垣地区　大中、大商
東濃地区　御嵩中、多治見工
飛騨地区　斐太中、益田農

等の諸学校は晩秋、霜は軍営に満つる頃だった。東西両軍の前哨戦に火蓋を切って対峙し、翌払暁各務原一面の遭遇戦で雌雄を決した。飛行機は両軍の上空を飛翔する。統監県知事は幕僚を従えて御成山に在り。といった調子で、軍国主義を遺憾なく発揚したものでした。

稲葉郡の青年訓練所連合会も右へならえで数回実施します。西飛行場の訓練に邪魔にならぬよう、朝八時には原頭一物無し、を約束する点は少し痛手であったが、戦場をすばやく立退くことも訓練の一つであった。

日支事変始まる

昭和十二年八月、第三師団は上海に向います。歩兵第六十八連隊は二十三日未明にウーソン敵前上陸を敢行します。私も赤紙で応召、中支へ駈付けます。翌年五月、徐州戦までは生き延びましたが、ここで重傷、内地還送。六八の補充隊勤務中、航空兵に転科の志望がかない、設置早々の「第一航空教育隊」で若鷲育ての任につきます。

この第一航空教育隊は航空兵の卵にそれぞれの特業を授け、基礎教育六か月で航空部隊に配属します。パイロットは別で、いわゆる地上勤務者です。機関、自動車、通信（有線無線）、高射機関銃機関砲、気象等の分科基礎教育で多い時は三〇〇〇名にものぼりました。

同十八年一月には第七飛行師団司令部に勤務となって南洋に行き、二年後に第十教育飛行隊に転勤、以前の飛行第一連隊です。

二十年一月から敵さんのB29による爆撃が頻々となり、又名古屋、又名古屋か、といっているうちに、各務原をやり出した。航空廠が狙われた。来るわ来るわ。今度は二連隊だ。今度は川崎だ。そら岐阜市がやられた。那加駅前もやられた。飛行機の分散、蔽体壕。修理工場の分置。

夜を日についての防禦体勢。その中から特攻隊を四回出した。まだ私の部隊は安全、爆弾も焼夷弾も見舞われてはいない。終戦後気がついた。それは米軍が進駐拠点にして、使用する目的のためでなかったかということだ。

グラマンを撃墜

その年六月九日、正午少々前

「空襲警報。敵艦上機伊吹山を東進。

「射撃部隊位置につけ」

もう敵艦上機「グラマン」四機、超低空で北からわが飛行場に進入。藤田中尉の指揮する射撃班はすぐ応戦した。一機が飛行場中央稍、北寄りで墜落炎焼。ヤッタ！バンザイ！ 誰言うとなく歓声があがった。

「藤田中尉殊勲だぞ」と手を握りあって喜こんだ。

この時私はこんな処置をした。

燃えているグラマンに急遽自動車を飛ばせ、機体、発動機、機上MGと弾薬、電気系統、搭乗員の被服等々、各主任班長に命じて、参考部品を取り外そうとしたが、全体が焼ける最中で、全々駄目だった。一名の操縦者も飛行機と一緒に焼けてしまった。すっかり焼いてしまえ

と考え方をかえた。

今の今まで憎い敵であったが、骨になったからには神だ。「葬ってやろう」「勇敢なる米軍飛行士之墓」と墨書して墓標を作り、板片で十字架も作った。焼け残りの翼端と、遺骨二本を持って、中山道の北側の民有墓地へ行き、東南隅に墓地を与えて葬ってやった。近くにあった古い竹の花筒を借りて野花を供え、おがんでやった。勿論私一人。

その夜松岡師団長から神酒が届けられたので、対空射撃班の班長藤田中尉を中心に祝盃をあげた。

B29は毎日定期便のように来るが、高射砲部隊もさっぱり効果なしで、各務原地区では私の部隊が戦果をあげただけだった。

終戦　敗戦

八月十五日正午、終戦の詔勅が下された。

兵は郷里へ復員する。

私の郷里は地元だ。落ちゆく先がない。

九月三日解隊式をあげた。

職務の関係上九月末に残物一切を県庁に引き渡した。

飛行場閉鎖と米軍進駐

解隊後は原一面人影のない草原に遷ったが、米軍が進駐する。明日にでも飛行機で飛んでくる。

元軍人の幹部は捕えられる。

婦女子はあぶない。

こんなデマが飛んで、年頃の娘を山奥の親戚や友人宅へ預けた人も大分いた。

結局二十一年に米軍の接収地となり、那加町の商店街が繁華街となって、米軍に金を落させようと、あの手この手でにぎわった。色々な犯罪もあった。パンパンも相当数集まった。赤い腰巻に魅力をもって……という笑話も残っている。「ムスメ」「カナズ」を一番先におぼえたとかいう話もあった。兵員の多い時少ない時、白系の多い時黒系の多い時、種々な変動も、がわから見ている程度で八年の歳月は流れた。東飛行場は引揚者の農耕場として譲渡され、バラックが点在して、甘藷と小麦の耕作が盛んになった。

自衛隊創設

（この項で自衛隊の細部を説明しましょう。）

航空自衛隊岐阜基地

航空自衛隊の任務

日本の空を外敵の侵入から守るのが航空自衛隊の任務です。

この防衛任務を果たすために、国内二十四か所にレーダー基地を設けて、絶えず大空を監視し、一方、全国八か所の航空基地に配置されているF一〇四J（栄光）F八六F（旭光）等合わせて、約五〇〇機の要撃戦斗機がいつでも発進できるよう待期しています。また、万一戦斗機の要撃から逃れて、更に進入してくる敵機を撃墜するために地対空ミサイル部隊（ナイキ・アジャックス）が要地に配置されています。

このような防空態勢を維持するために、隊員約四六、〇〇〇名が日夜訓練に励むとともに、装備の充実、近代化に努めています。

特に外敵の侵入を一刻も早く探知し、要撃をより効率的有効にするため、昭和四十三年度にはバッジ、システム（自動警戒管制組織）による警戒態勢が完成した。更に新らしいミサイル・ナイキJや次期戦斗機F四EJなどが第三～第四次防衛力整備計画で逐次整備する計画になっている。

岐阜基地

沿革　昭和二十九年、米軍の接収が解除になって、八月航空自衛隊が創設され、三十二年一月臨時岐阜補給隊が当地に編成されます。ここで航空自衛隊基地として発足し、米軍との共同使用基地となります。三月には実験航空隊および防衛庁技術研究本部試験場が浜松から移駐するとともに、岐阜警務分遣隊が編成され、また、同年六月には岐阜気象分遣隊、岐阜管制分遣隊が編成されたのであります。

昭和三十三年一月臨時岐阜補給隊は、新らしく第二補

給処として発足し、また、同年三月には整備学校の分校が編成されます。

同年六月基地は米軍から全面的に返還され、名実共に航空自衛隊の岐阜基地となったのであります。その後多少の変遷はありましたが、同三十七年七月岐阜病院の新設を見て、現在に至っております。

現在基地所在部隊　七筒部隊

人員　約二、〇〇〇名

基地総面積　約四〇〇万平方m

建物　約四〇〇棟

滑走路　長さ二、七〇〇m　幅　四五m

第二補給所　航空自衛隊で使用する航空機を一機でも多く、最も安全に飛行させるために、航空機の部品等をいつでも、どこへでも配分、補給する後方機関です。

実験航空隊　航空自衛隊における航空機、飛しょう体、地上電子器機、その他各種装備等が実動部隊で実用に供し得るか否かについて、各種の試験をおこなう航空自衛隊唯一の実験審査部隊であり、研究、技術開発の分野において、極めて重要な役割を果しています。

岐阜管制隊　航空機の離着陸に必要な指示や、航空機の安全飛行のために、日夜を分たず、空の交通統制を担当しております。

岐阜病院　航空自衛隊唯一の病院として、隊員および家族の診療や研究が、最新の機械を使って実施されています。

厚生活動　基地には教養部と体育部のクラブ活動部門があり、教養部には、書道、華道、お茶、舞踊部。運動部には、ラクビー、バレー、陸上競技、野球、相撲、バスケット、スキー、柔道、剣道、銃剣道、空手部等三十余種のクラブがあって、隊員は教養部で情操の育成に、体育部で心身の鍛錬にと努力しております。

ナイキ

ナイキ・Jとは

米陸軍によって開発されたナイキ・ハーキュリーズをもとに、技術提携によって我が国で生産することになった地対空ミサイル。

ただし、現有のナイキ・アジャックスと同様、核弾頭はつけられないように設計されています。

構造は、ナイキ・アジャックスと基本的にはあまり変ってはいませんが、やや大型となり、しかもブースター（補助推進装置）はアジャックスに使われているものを四本束ねて強力になっているため、性能は飛躍的に向上しています。

高射群の配備

第三次防衛力整備計画の期間中（昭和四二年～昭和四六年）に「ナイキJ」装備の部隊を二つ（第三高射群）――北海道中央地区、（第四高射群）――阪神、中京地区を（予定）新設します。

この外、現在ナイキ・アジャックスで装備されている第一高射群を「ナイキJ」に装備替えします。

わが国の防空組織

空の守りには、次の三つが必要です。

レーダー網　レーダー網によって、日本の領空とその辺を飛行する航空機を、昼夜の別なく監視しつづけ、不法侵入機があるときは、これに対する要撃機の発進から帰投まで誘導を行ないます。

レーダー基地は日本全国に二十四か所設置されています。

有事の際における防空戦斗方式

レーダー基地が、わが国を襲う目的で侵入してくる航空機を発見すると

1、防空指令所へ報告する

2、防空指令所は航空基地へ指令する、要撃戦斗機が飛び立ち、遠い空域でこれを迎撃する。

3、戦斗機の要撃ラインを突破して来る侵入機に対して高高度のものはナイキが応じます。

4、低高度のものには、陸上自衛隊のホーク（地対空誘導弾）が、目標を割当てられて応じます。

5、陸上自衛隊では又高射砲や高射機関銃も対空射撃をします。

ナイキJを装備することによって

航空機の性能は、スピードで音速の二倍から三倍へ上昇限度も三万メートル以上へと飛躍的な進歩をとげています。これに対処するため、世界各国では、特に対空

誘導弾（ミサイル）の増強に力を注いでいます。

もちろん防空の万全を期するためには、要撃戦斗機、対空誘導弾、高射砲等、それぞれ異なった特性の各種兵器が渾然一体となって運用されることが必要ですが、その中で対空誘導弾のしめる比重は、ますます重くなる傾向にあります。

わが国のように、国土を横断するのに十分も要しない地理的条件下では、いよいよ高性能の対空誘導弾が必要となります。

もしわが国を襲う侵入機があれば

ナイキの発射方法

1、直ちに「目標捕捉レーダー」がこれを捉えます。

2、これを受けて「目標追随レーダー」が目標機を追いかけます。

3、目標機の位置、方向、速度、高度など射撃に必要な諸元は、これらのレーダーから刻々「統制トレーラー」の電子計算機に送られて一瞬のうちに要撃位置が計算されます。

4、この要撃位置に向って発射台からナイキが発射されます。

5、発射されたナイキは「ミサイル追随レーダー」により地上からの無線操縦で目標機に誘導されます。

6、ミサイルが目標機に到達した瞬間、弾体が炸裂し、目標機を撃墜します。

ナイキJの効率性

1、命中率は、一〇〇％に近い数値を示します。第二次大戦当時の高射砲が約三、〇〇〇発に一発、現在においても約一、〇〇〇発に一発の割合といわれますので、高射砲とは比較にならない高い効率といえます。

2、威力半径が大きいため、ナイキ・アジャックスが一発一機を目標にしたのに比べて、ナイキJは、複数機に対処することができます。

ナイキJの安全性

1、構造上幾重にも安全装置が施されております。

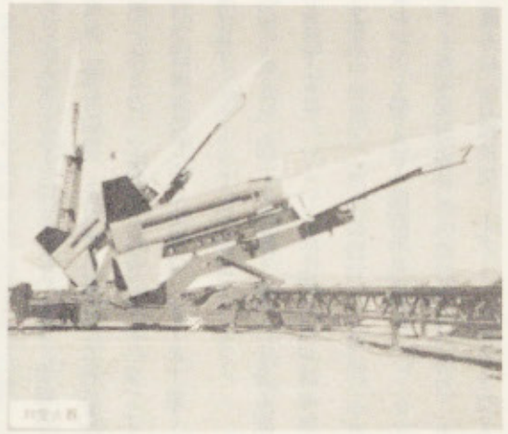
（現有のナイキ部隊で過去に事故を起した例は皆無

です。」

2、ナイキ陣地は、火薬類取締法による保全距離をとって設置されます。

3、配置場所で実弾の発射訓練は行ないません。

次の世紀にはどんな変化するでしょう。（完）



自衛隊の活動のいろいろ

- 台風・豪雨・豪雪・地震などの被災地への救援
- 遭難した人達や航空機・船舶などの捜査や救助
- 機雷・不発弾などの爆発物の除去や処理
- 道路や橋の新設・改修・復旧などの工事
- 学校の運動場などの敷地造成
- 途絶した通信線の回復などの通信工事
- 伝染病が発生しそうな地域などの防疫
- 山奥などのへき地での診療
- 被災地などへの食糧・衣料・薬品などの輸送
- 離島などの急病患者の空輸
- 国民体育大会などの運営支援
- 砕氷艦「ふじ」などによる南極観測の支援
- 海氷観測などの支援
- 人工降雨などの支援
- 断水や水不足の地域への給水

防衛庁の組織

- 内閣総理大臣
  - 国防会議
  - 防衛施設庁
  - 防衛庁長官
    - 事務次官
    - 政務次官
    - 内部部局
      - 長官官房
      - 防衛局
      - 人事教育局
      - 衛生局
      - 経理局
      - 装備局
    - 統合幕僚会議
    - 陸上自衛隊
      - 陸上幕僚監部・部隊・機関
    - 海上自衛隊
      - 海上幕僚監部・部隊・機関
    - 航空自衛隊
      - 航空幕僚監部・部隊・機関
    - 附属機関
      - 防衛研修所
      - 防衛大学校
      - 技術研究本部
      - 調達実施本部
    - 共同機関
      - 自衛隊体育学校
      - 自衛隊中央病院
      - 自衛隊地方連絡部

陸上自衛隊

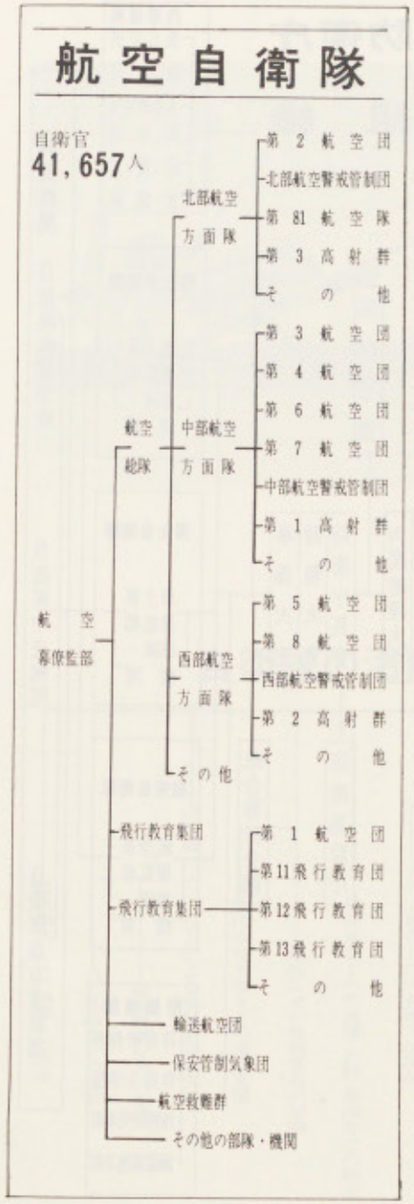
- 自衛官 179,000人
- 予備自衛官 36,000人
- 陸上幕僚監部
  - 北部方面隊
    - 第2師団
    - 第5師団
    - 第7師団
    - 第11師団
    - 第1特科団
    - 第1戦車群
    - 第3施設団
    - その他
  - 東北方面隊
    - 第6師団
    - 第9師団
    - 第2特科群
    - 第2施設団
    - その他
  - 東部方面隊
    - 第1師団
    - 第12師団
    - 第1空挺団
    - 第1施設団
    - 第1教育団
    - その他
  - 中部方面隊
    - 第3師団
    - 第10師団
    - 第13師団
    - 第4施設団
    - 第2教育団
    - その他
  - 西部方面隊
    - 第4師団
    - 第8師団
    - 第3特科群
    - 第5施設団
    - 第3教育団
    - その他
  - 通信団
  - その他の部隊・機関

● 各国の軍事力，国防費の比較

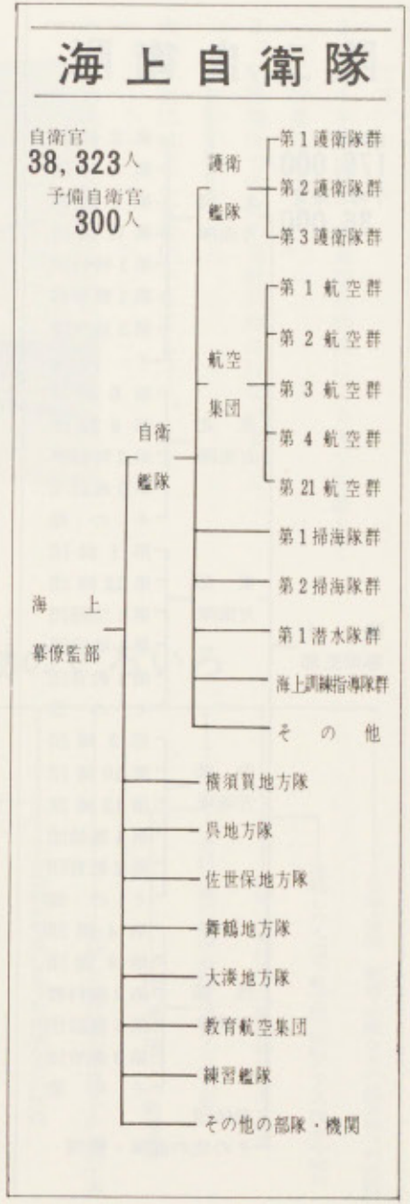
国名	陸軍	海軍	空軍	国防費	
	兵員数	艦艇トン数	航空機数	国防費	国民総生産に対する比率
	万人	万トン	機	億円	%
アメリカ	136	800	15,000	26兆 7,840	8.6
イギリス	19	144	2,300	1兆 9,994	5.1
フランス	33	44	2,100	2兆 2,262	4.4
西ドイツ	33	24.5	1,800	1兆 8,886	3.5
イタリア	30	23	1,100	8,582	2.9
韓国	57	7	380	1,073	4.0
中華民国	38.8	14.5	540	1,580	9.2
ソ連	200	300	11,600	14兆 1,599	8.5
中共	245	30	3,200	2兆 6,100	9.0
北朝鮮	37	2.5	700	2,520	24.9
スエーデン	5 動員時60	12	1,500	3,956	4.0
日本	17.9	13.8	960	4,949	0.79

(注)(1) 国防費については1969会計年度のもの。
(2) 中共の国民総生産に対する比率は1968年の数字である。

航空自衛隊



海上自衛隊



あとがき

同窓会役員

会長　加藤　嘉雄
副会長　古川　守一（兼会計）
　　中村　艶子　　日比野　昇
事務局　柴山　幹夫（小学校教頭）

部落役員

山脇町	佐々木弥寿美	佐々木弘光
下切町	松波　満男	仙石　明光
西町一丁目	苅谷　博	足立　毅
二丁目	松波　幹夫	足立　孝夫
三丁目	松波　新治	堀　市郎
四丁目	五島　彰治	加藤　進次
五丁目	丹賀沢正信	田中　良治
六丁目	田中美智雄	富樫　政孝
東町長平	丹羽　久義	柴田　司
両内野	千伝　昌徳	村瀬　好久
北島	永井　定郎	永井　春夫

小島　三男	岩井　富夫
磯谷とみゑ	日比野すみ子
小野木三紘	小野木昭子
足立　始	大橋　房子
足立　安正	足立　宣義
岸　孝一	松波くにゑ
富樫　正幸	田中　啓嗣
田中　祥照	田中つや子
丹羽　武久	丹羽　好道
増田　末吉	日比野金治
永井　将子	稲川　勝代

編纂委員

委員長　加藤　嘉雄
副委員長　田　中　桂　　横幕　信夫
会　計　丹羽　久義　　柴山　幹夫
監　事　武山　秀雄　　永井　弘道
委　員　小島　良一　　佐々木　保　　苅谷　さ江
水野　元由　　日比野　昇　　石屋　良仙
小野木三己　　小野木　明　　倉知　芳逸
尾関　正夫　　足立　勘二　　松波　民市
中村　艶子　　松波　久夫　　富樫源十郎
田中松太郎　　後藤　新平　　富樫　心行
山本　里水　　丹羽多津子　　丹羽　一郎
丹羽　民栄　　古川　守一　　村上　梧楼
日比野静夫　　永井　良一　　永井盛三郎
永井　行正　　皆川　総平　　永井　武男

編纂委員長の労苦と功績を憶う

日本大学教授　岩　井　肇

稲羽東小学校創立百年を記念して、このたび百年史が編纂刊行されるに至ったことは、同窓生の一人として、まことに慶祝の至りに堪えない。この記念すべき百年史の編纂委員長に竹馬の友の加藤嘉雄君が就任、この事業を担当したことは、これまた私にとっては、ひとしお感

懐深いものがあり、他人ごとではないような喜こびを禁じえないものがある。

実は一昨年、この計画が立てられた当時、加藤君からその情報をきき、相談をうけたことがある。その時大体の構想や、資料の収集方針などをたしかめたところ、かなり実現可能性があることがわかった。こうした状況をふまえて、一つ声援してくれという、君の要望だったので、できる限りの協力をしようということになったわけである。

私と加藤君とは同級生で、私が小学校三年生の時、中屋の敬恪小学校から前宮小学校へ転校以来、どういう縁か知らぬが、非常にウマが会って、大変仲のよい友達となった。そして卒業するまで六年間、その親しい交友は続いたものである。しかも小学校時代ばかりでなく、学校を出てから君は岐中に軍隊に、そして教員などの生活が続き、私は村を出て学生や新聞記者として異郷に暮すこととなったが、自来六十年に近い間、遠くはなれていても、絶えず深い交友が続き、何かと連絡し合い、今でも何事によらず、打ちあけて相談ができる間柄が続くと

いう不思議な縁がつながっている。

加藤君は、小学校在学中、殆んど級長を続ける秀才で、他の追随を許さず、一年志願兵になっても、トップで少尉に任官するという抜群の成績をおさめたものである。軍隊の任期が終り、除隊すると早速、村の青年団長に、就任し、それまで無かった団員の制服を制定するなど、県下に話題を呼んで有名になり、県から表彰をうけたこともある。

青年団長がすむと、村では最初の将校ということで在郷軍人分会長に就任した。私は補充兵で軍隊にはゆかなかったので、毎年夏期には簡閲点呼のため、東京から村へ帰り、点呼をうけたものだ。その時分会長としての加藤少尉の指導にも接したことを覚えている。在郷軍人分会長としても異色の活動をしたもので、東京の本部から表彰をうけるなど、顕著な輝かしい足跡を残したものであった。

昭和十二年、日支事変が始まると、中尉となって直ちに前線の中隊長として奮戦したが、徐州戦で重傷を負い、九死に一生を得て内地に帰還して病院で治療した。全快後は時局に鑑みてか航空兵に転科して、中隊長や南方の前線師団の副官となり、二年間、文筆作業その他の副官業務をつとめて終戦を迎えた。終戦時には、各務原飛行隊の部隊長として、飛行隊を県庁に引渡しするなどの、終戦処理の責任者としての任務を完全に果したものである。

私は徴兵検査の時、岐阜神田町の永楽屋旅館で永井良一氏や加藤君と一緒に泊って、りりしい徴兵検査をうけ、加藤君は甲種合格、私は補充兵ときまったことを今でも記憶している。また君が岐阜六八連隊で見習士官をしている頃、東京から帰郷した際、君を連隊に訪ねて語り合ったことも忘れられない。昭和十九年秋、戦争も大分末期のころ、私は毎日新聞の台北支局長として台湾の台北に駐在していたが、君が南方から飛行機で公務帰還の途次、私を毎日新聞の支局に訪ねてくれたことがある。運悪く私が高雄地方へ出張中で会えなかったことは残念であった。

加藤君は終戦と同時に公職追放となり、止むなく本来の農業の仕事にもどらねばならぬこととなった。しかし、

性来の活動意欲と練達な手腕は農業だけでは満足することができず、町議会議員に出馬したり、友人の会社の事業を手伝って大きな成果をおさめたりした。その間、小学校の同窓会長として母校の興隆を、卒業生の融和のために情熱を傾けたものである。現在、私ども大正五年の三月前宮小学校の高等科を卒業した同窓生は十五名が生き残っているが、この同窓生は毎年春には一杯飲み秋には懇親旅行の会を作って、大分以前から各地を見物しながら親交を続けている。これの幹事長役も君は多年にわたって引きうけている。私も数年前、浜松の館山寺旅館や江の島旅行などには数回東京から合流した。そして一晩、五十余年前の悪童時代の回想談に花を咲かせたものだが、みんなが昔と変らぬ顔つきで、思い出話ができることは気持ちを子供時代によみがえらせて、若返りさせてくれてまことに喜こばしい。君は、終戦後から二十何年引続いて軍人恩給復活に関する県連合会の役員として、従軍者のためにこの問題に取組むなど、公私にわたって縦横の活動を続けていることは頼母しい限りである。

今度の百年史編纂という仕事は、いわゆる村の関係者にとっては大変大きな事業である。今日の場合、旧前宮村としてこの事業を担当するには加藤君は最適任者で、他にこれを発見することは困難であろう。地元の人々からみても、また他郷に出ている人からみても、君がこの事業を担当した適任者であろうということに対して、双手をあげて喜こんでいるであろうと思う。

よわいすでに古稀をすごして、今後の余命はさほど長いとはお互に思われない。この時、この大事業を引受けて、健康かつ鍛練した身心と、老熟した手腕を、勤勉と努力を通じて遺憾なく力量を発揮して、この歴史に残る金字塔を打ち立てる業績を完成したものである。このことは君の人生の記録として長く止まることは勿論、郷土や何千人の卒業生への尊い奉仕として、いつまでも消えぬ明るい灯として、光りを放ち続けることと思う。

君の労苦を憶い、その功績を称えると共に、今後さらに減死奉公、不惜身命の意気込みで、人のため、世のため、生き甲斐のある人生の旅路を続けてもらいたいことを切望してやまない。

編纂を終えて

編纂委員長　加藤嘉雄

この世に生をうけて、各自は幸福に暮したいと願望し、勤勉努力いたします。けれども、如何に個人だけが幸福な生活を続け得たとしても、一朝自分の住む国家が、他国に侵略されようものならば、各自の生活は根底から崩壊してしまいます。今次大戦で明治・大正生れと昭和初年に生れた者は、いやというほど、その苦しい体験をさせられました。

国民相互は、自分の生活の安定、平和を欣求するならば、各自の努力とともに、自分が所属する祖国が興隆することにも、重大関心を抱かねばなりません。国家を無視して自分だけ幸福になろうとしても、それは絶対に不可能であります。

太平洋戦争で無条件降伏をした民族が、僅か十数年間で生れ変ったように復興再建し、四半世紀の今日では世界驚異の経済繁栄を見るに至りました。惨敗の国家が不幸を転じて繁栄に導いた源泉は種々ありましょうが、何といっても、日本民族の伝統的不屈不撓の勤勉努力に因ることは声を大にして申しあげても決して過言ではないと思います。この奥に潜むそして力強い幼児教育こそ偉大な役割を持つもので、辛酸をなめた人即ち明治・大正の人々であります。昭和の人ももう四十五才を越えているのでその一肩を担っているにはちがいありません。

家に不学の子なくと学制が公布せられて、逸早く不惜学校が産声をあげて茲に百年、歴史は一日にして成るものではありません。百年かかって作られた百年の歴史は、開校以来風雪に耐えつつ年と共に発展をたどってきた姿を見るにつけ、恩師の各位、卒業生先輩の皆様の偉大な足跡が今も力強くよみがえってくるのを覚えるのであります。

今ここにできあがった稲羽東小学校創立記念史不惜百年の本が、

〃果して卒業生の皆様と、因縁ある各位に参考になる

MEMO

か知らん？　読んでいただけるか？　温故知新の資料に役立つか？〃

文を書くことになれていない上に、本につくる経験を持たぬ私が「鵜の真似する烏・・・・・」を知りつつも、無鉄砲にしゃにむに頑張って手をつけ、只々一途に奉仕の誠意をもって浅学非才を顧みず、熱意であたり怒力で補うと決意を固め、ありったけの英知をしぼってその趣旨に沿うよう、発刊の夢にかけて、聴問に取材にと東奔西走いたしました。幸にも関係各位の熱烈なるご協力と、お力添えによりまして、予測以上の大冊となりました。

ご寄稿の皆様が、飾らず、つくらず、ありのまま感じズバリをお書きくださいましたので「泥くさくて素人らしい」ところが本書の特色であると自慢ができます。

創立百年のその日に記念祝賀式をあげ、本書が発行されます喜びを私の畢生の光栄と深く肝銘いたしまして、謹んで感謝の意を表する次第でございます。

（合　掌）

稲羽東小学校創立記念史　不惕百年（非売品）

印刷　昭和四十八年一月三十一日

発行　昭和四十八年二月十五日

編纂者　加藤嘉雄

発行者　稲羽東小学校同窓会

印刷所　岐阜市鹿島町二丁目三番地
新潮印刷株式会社
〒五〇〇　☎（〇五八二）代五一一二四五